法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-13

サンクト・ペテルブルグの二葉亭四迷

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Hosei journal of sociology and social sciences / 社会志林
(巻 / Volume)
66
(号 / Number)
2
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
63
(発行年 / Year)
2019-09
(URL)
https://doi.org/10.15002/00022343

サンクト・ペテルブルグの二葉亭四迷

宮永　孝

はじめに
一　朝日新聞社　ロシア特派員
一　神戸を出航　大連へ
一　大連より満州里へ
一　シベリア鉄道の旅
一　ペテルブルグの貧民横町に下宿
一　〝白夜〟による不眠症
一　肺の疾患により海路帰国の途につく
一　淫落の町　ペテルブルグ
一　謎の女性〝ジェ〟
むすび

はじめに

令和のこんにち〝二葉亭四迷〟のペンネームを聞いても、だれのことかわからぬ人がいるかも知れない。このような筆号をつけた人は、本名を長谷川辰之助（一八六四～一九〇九、明治期の小説家、ロシア文学者）といった。生活上の必要から、小説「浮雲」（明治二〇～二二年に発表）を書かざるをえなくなり、自虐的にもらしたことばが、〝くたばッて仕舞へ〟（二葉亭四迷）であったようだ（「余が半生の懺悔」）。

「年譜」をみると、その生きざまは平たんでなかったことがわかる。おもなる職業の変せんは、つぎのようなものであった。

明治23年（一八九〇、二七歳）……官報局の翻訳係、月給三五円。のち四〇円。

二葉亭四迷

明治27年（一八九四、三一歳）……某通信社の外国新聞翻訳係（英文）。
明治31年（一八九八、三五歳）……陸軍大学校のロシア語教授嘱託。月給二五円。
海軍編修書記（海軍軍令部付）。三級俸。
明治32年（一八九九、三六歳）……東京外国語学校のロシア語教師。高等官七等、十級俸。
警務学堂堤調代理（顧問教師）。銀二五〇元。
明治37年（一九〇四、四一歳）……『大阪朝日新聞』東京出張員。月給一〇〇円。ペテルブルグ特派員。

かれの生涯をちらりと見ただけでも、生活のため、あるいは本業の片てまにおこなった翻訳や小説の執筆をのぞくと、語学を使ってのしごとが多い。

二葉亭は尾張藩の下級武士の子として江戸に生まれ、幼なくして漢学をまなび、かたわら名古屋藩学校において日本人とフランス人からフランス語の手ほどきをうけ、またのちにイギリス人やアメリカ人から英語を学んだりした。陸軍士官学校を何度も受けたが、学科および身体検査で不合格となり、東京外国語学校露語学部（卒業まで六年かかった）に給費生として入学したが、約五年ほど在籍したのち、自主退学した。外国語学校が廃止となり、商業学校に編入されることを快くおもわなかったのが退学した理由と考えられている。

外国語学校時代の同級生の回想によると、二葉亭のロシア語は「ズバ抜けてゐて、それこそ級中では特に光ってゐた」というから、学力抜群だったのであろう。ロシア人教師から露文を書かされることがあった。外国語による作文は、いちばん本人の語学力がもろに現れるものであり、ごまかしのきかぬものである。が、同級生の書いたロシア文は、まっ赤に直されているのに、かれの文章はまことによく書けていて、たまに赤い筆が入っているくらいのものであった。つまり直すところがあまりなかったということである。だから教師も長谷川にたいへん敬意を払っていた（大田黒五郎「畏友二葉亭四迷を想ふ」）。

語学ができることが、かれの天性であったとしても、授業の合い間やひまなときにさかんにロシア文学や批評家の書をよんだ。愛読したものは、ゴンチャローフ（一八一二～九一、ロシアの作家。プチャーチン提督の秘書としてパラーダ号で来日）やドストエフスキー（一八二一～八一、ロシアの作家）のものであった。前者は文章の調子、後者は作者の心理解剖や宗教趣味などにひかれた。

かれは本来、官立の学校で、いやな政府の世話によって勉強するのがきらいであり、社会主義にかぶれていたから、ラサール（一八二五～六四、ドイツの労働運動家、社会主義運動の指導者）の演説集やペリーンスキー（一八一一～四八、ロシアの評論家）の批評文などを好んだという（「予の愛読書」「余の思想史」）。

明治のころ、日本における文学者の地位はひくかったようだ。二葉亭はそれを嘆じていたという。小説家というと、一種の軽べつをもってみられたというから、偏見があったということであろう（矢崎嵯峨の屋君談「二葉亭君の性情」『太陽　臨時増刊』第16巻第2号所収、明治43・1）。

二葉亭じしんも〝文士〟（小説家）とみられることをひじょうに嫌ったようで、文学上の天分はない、といっていた。もしじぶんの作品に多少の価値があるとしたら、〝孜々精励の賜〟（たゆまず努力した結果の意）だという（樋口龍峡「二葉亭君の露国行に就て」）。さらにじぶんの一生を献げても悔いがないのは、文学の方面ではなく、国際的事件に貢献するにあると語った。かれは子どもの時分から――維新の志士（国家や国民のために尽力する志をもった人）的傾向があり、将来日本にとって大きな憂い、大きな心配となるのはロシアだとおもった（「予が半生の懺悔」）。

これはまたかれがロシア語を学ぼうとした動機でもあった。二葉亭がさいごに職につく『大阪朝日』入りについて述べてみたい。

就職にさいして口ぞえしたのは、内藤湖南（一八六六～一九三四、明治から昭和期の東洋学者）であり、ちょうど日露戦争（一九〇四～一九〇五）がはじまるころであった。二葉亭はロシア通と目されており、新聞社のほうでも必要な人材とみていたから採用したようだ。しかし、かれは入社してもすぐ結果をあらわさなかった。たのまれしごとをいとわなかったようであるが、凝り性であったから、くわしく、ふかく調べてくる。が、新聞の読みものとしては適さない。日露のいくさがすんでから、ひじょうに勧めて書かせた小説が「其面影」であった。その後、夏目漱石が入社し、かわるがわる小説をかくことになった。

ゴンチャロフの戯画

明治四十一年（一九〇八）三月、ロシアの一流紙の記者ダンチェンコ（一八四四～一九三六、もと従軍記者。多産な作家）が来日した。このとき二葉亭は記者として訪ね、能楽堂へも案内した。かれはできるだけロシアの来客を親切にあつかった。そのうちにロシア行の話がもちあがった。ダンチェンコは、社主の村山龍平（一八五〇～一九三三、明治から大正期の新聞経営者）に、この人をロシアへやれと勧めた。ロシア行は二葉亭のかねての宿望であった。一応、社にはロシア派遣の願書をだし、それが許可となり、いよいよロ

シアへ行くことになった。

本稿は二葉亭のロシアへの出発から、遺骨となって帰還するまでの行程、ことにロシアの首都サンクト・ペテルブルグにおける特派員としての私生活について綴ったものである。

一　朝日新聞社　ロシア特派員

明治四十一年（一九〇八）六月六日――上野公園の「精養軒」において、二葉亭の送別会がおこなわれた。六十名に案内状をおくり、参加者は三十九名。当時の文壇のそうそうたる人物が出席した。たとえば――

坪内逍遙　内田魯庵　田山花袋
長谷川天渓　広津柳浪　島村抱月
正宗白鳥　小山内薫　蒲原有明
昇　曙夢　吉江孤雁　相馬御風
川上眉山

など。

六月十二日――雨もようのなんとなく湿っぽい夕方の六時半、二葉亭は妻子や親戚のもの、知人らに見送られて、新橋駅を出発し大阪にむかった。

かれは何も語っていないが、のったのは急行列車である。明治二十九年（一八九六）に、新橋――神戸間が開通し、同三十三年（一九〇〇）以降、一等寝台・食堂車も連結し、時速約三五キロで走った。神戸行のこの急行は、新橋を発ったのち、品川――大森――神奈川を通過したのち

――平沼（七・九）――大船――藤沢――大磯――国府津（八・九）――松田をへて、山北に午後八時四十五分に着いている（明治44年［一九一一］五月改正の新橋――下関間の列車時刻表を参照）。

国府津（現・神奈川県小田原市国府津四丁目）までは、二十年来の友横山源之助（一八七一～一九一五、明治期の社会問題研究家。『日本之下層社会』をあらわす）が同行してくれた。が、国府津からは、まったくひとり旅になった。おまけに雨が降りだしたから、よけいにさみしい気分になった。

隣席にウラジオストク（ロシア東部――ハバロスクの南南西六四〇キロに位置。シベリア鉄道の終点）へ帰るというロシアの中尉がすわっていたので話をした。汽車が山北駅（神奈川県西部――いまの御殿場線が東海道本線であったころの駅）に着いたとき、名物の〝アユずし〟[1]を求めようとすると、となりのロシア士官は、何をおもってかわたしもほしいという。二葉亭は、すしというのものは酢につけた魚を負んぶした米の飯である、と注意すると、相手は出した手をひっこめた。

そのようすを見ていた乗客らは、どっとふきだした。二葉亭はじぶんが求めたアユずしをすそわけしようとしたら、そのロシア人は首をふって食わなかった。

山北駅より汽車は、小山――御殿場――佐野――三島――沼津へとむかった。やがて夜もふけるにつれて乗客もてんでんばらばらに寝入った。いびきをかいている者、口からよだれをたらしている者、だらしなく座席の羽目板にもたれている者――どの寝すがたも、あまりみっともよいものではない。

ロシア士官は、眠そうなあくびをした。車中でよく寝れないなら、四円だせばらくに寝てゆける（寝台車にのれる）と教えてやった。やがて相手も睡魔におそわれ、コクリ〳〵とし、その大柄が二葉亭の肩にもたれかゝってきた。二葉亭は、

（これこそ日露のもたれ合いか……）

と思うと、心の中でおかしかった。

二葉亭は、出発まえの数日間ろくに寝ていなかったから、少々ねむたかった。眼はしょぼしょぼしてきたが、夕方新橋駅で別れた人たちの顔がしばらくちらついた。そのうちに寝入ってしまった。

目がさめたのは名古屋であった。件（くだん）のロシア士官とは米原（まいばら）（滋賀県東部）で別れた。十三日の朝八時、二葉亭は大阪に着いた。かれは梅田（大阪市北区）で下車すると、予定の宿屋へむかい、まず枕をもとめ横になった。

その後、大阪朝日新聞社をたずね、社主に面会し、大連経由でロシア入りをしたい旨をのべ、承諾をえた。二葉亭が渡欧にさいして社から受けとった三ヵ月分の前渡金は、計一八〇〇円であった。その内訳はつぎのようなものである。

旅費・手当（てあて）（報酬、給与の意）・電報料……一八〇〇円。

このうち一〇〇〇円を紛失しても取りもどせる巡回手形（為替手形）というものにした。

残りの八〇〇円を現金で持参することにし、胴巻き（胴に巻きつける細長いふくろ）に入れ、肌身をはなさぬようにした（妻柳子宛書簡）。

明治四十三年（一九一〇）当時、一ルーブルは一円三銭のあたいであった。

一八〇〇円は、いまの一八〇〇万円ほどに相当する金額であろうか。ちなみに当時の官費留学生の学費（生活費）は、半年分をひとまとめにして前渡しされたという。

外務省留学生……一ヵ月　一〇〇円（半年分＝六〇〇円）
参謀本部の留学生……一ヵ月　二〇〇円（半年分＝一二〇〇円）

留学生は金をわたされた当初は、うきうきした気分であるが、四、五ヵ月もすぎると、青菜に塩で意気がふるわなくなったという（清水三三「恩師二葉亭四迷の想い出」）。

ジェット機時代のこんにち、海と陸の距離は大いにちぢまり、十数時間でヨーロッパにいけるようになった。が、当時は船と汽車を乗りつぎ、不便をしのいでペテルブルグに行くしかなかった。

日本から露都へいく経路は、大きくわけて三つあった。いちばん近いのは、シベリア鉄道を使う方法。つぎはアメリカ経由。もっとも日数を要

するのは地中海ヨーロッパ（北イタリアのゼノア経由、南フランスのマルセーユ経由）のルートであった。

二葉亭はロシアへ入国するまで道草をくっているが、その道程はつぎのようなものであった。

東京（出発）――大阪（宿泊）――敦賀（つるが）（宿泊）――大阪（宿泊）――神戸（出帆）――宇品（通過）――門司（出帆）――大連（宿泊）――長春（宿泊）――ハルピン（宿泊）――満洲里（停車、乗りかえ）――チタ（通過）――ペトルフスク（停車）――タイホイ（乗りかえ）――バイカル（停車）――イルクーツク（停車）――ニジネウディンスク（通過）――クラスノヤルスク（通過）――アチンスク（通過）――オビ（停車）――カインスク（通過）――ペトロバブロフスク（停車）――チェリャビンスク（通過）――アシャーバランショフスコイ（停車）――ウファ（停車）――サマラ（通過）――ペンザ（停車）――モスクワ（到着。二泊後、出発）――サンクト・ペテルブルグ（到着。「イギリス・ホテル」に二泊後、下宿に移る）

かれは最終目的地の露都につくまで約一ヵ月かかっている。

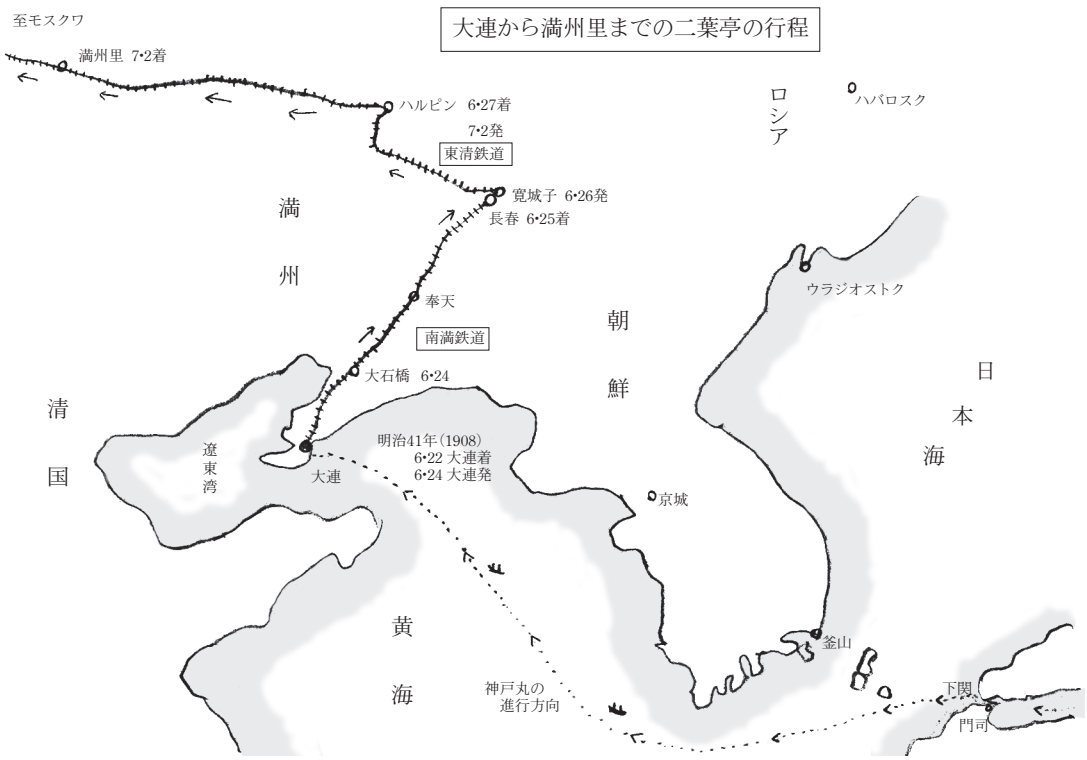
ともあれかれは十三日の午後三時半大阪をたち敦賀へむかい、夕方到着。敦賀へ行ったのは、満鉄と東清鉄道との連絡運輸開始の交渉のためにサンクト・ペテルブルグにおもむいた後藤新平（一八五七～一九二九、明治・大正期の政治家、当時桂内閣の逓相（ていそう））に諸新聞の記者とインタビューするためであった。

十四日、二葉亭はロシアから帰国した後藤と会見し、米原まで同行した。が、車中ごく内々の話（対ロシア政策）をきくことができた。夕刻、大阪についた。十五、十六日と大阪に宿泊した。十六日は大阪朝日の社員らが送別会をひらいてくれた。六月十七日の午前七時――社主の村山龍平、鳥井素川らに見送られ、大阪駅を出発、神戸へむかった。三ノ宮駅（東海道本線）で下車すると、出迎えの長田某の出迎えをうけ、神戸の埠頭へむかった。

一　神戸を出帆　大連へ

午前十時半、神戸支局や大阪毎日の記者らに見送られ、沖に停泊する日本郵船（？）の大連行の「神戸丸」（二八三〇トン）に乗り込んだ。船室（キャビン）（一等）に入ると、〝花のような美人〟がいて、腰をかがめてあいさつされた。二葉亭はひじょうにおどろき、目を丸くし、

――人ちがいではありませんか。
といったら、その女性は、
――いいえ、日向（ひなた）の家内でございます。
といったので、はじめてわかった（「遊露記」其三）。
（あゝ、これはわが親友・日向利兵衛[2]の細君［種子（たねこ）さん］だ……）
この美人の奥方からは、香水をかけたみごとな花束を贈られた。
午前十一時、船は錨をぬくと出航した。かれは見送り人を乗せたはしけ（小蒸気船）が見えなくなるまで舷側に立っていた。
そのあと船室にもどり、ソファのうえに、立ち木を切りたおしたようにドサリと倒れると、死人のごとくこんこんと眠った。
十八日の朝六時半――宇品（うじな）（広島市南部――宇品港）についた。ときどき細かい雨がふったので、上陸をみあわせ、手紙などをかいた。午後三時半、船はうごきだした。この日、後藤から聞いた話の一件をかき、社のほうに送った。十九日の午前一時半、門司（もじ）（北九州市門司をしめる旧市）についた。午後二時、出航。当地から旅客が多数のり込んだため、相客もふえた。豪雨となり、船ははげしく動揺し、テーブルよりビンや食器が床におちた。夕方、船客のほとんどは、船室にこもった（「手帳二十一」）。
二葉亭は、一等の船客であったから、部屋はきれいだったし、食事も三度とも西洋料理であった。本人にいわせると、物ごいだった者が、一足とびに華族になった気がしたという。ボーイにかしづかれ、「ハイ」「ハイ」といわれるたび、何となく気はずかしいおもいをした。家ではよいくらしをしているような顔をし、わざと大物のようにふるまった。
二等客は十人ほど、一等客は二葉亭だけであり、少々さみしい思いをしたらしい。十時ごろ就寝したが、ふしぎにもよくねむれたという（妻宛書簡）。
二十日、目がさめたら午前六時であった。風はやみ、船はゆっくりと航行していた。が、やがて完全に止まった。船はすっぽりと霧にとざされていた。船は巨文島（きょぶんとう）［コムンード］（韓国南部――高興半島先端から南四三キロに位置）のちかくだという。午後、二時ごろガスは晴れ、船はうごきだした。が、夕方六時ごろ、また霧が出はじめ、ふたたび船はとまった。が、七時ごろまたうごきだした。
二十一日、朝から雨がふった。とても寒い。午前九時ごろ、七発島の灯台をすぎ、外洋にでた。この島は、乗客のみたさいごの島であった。一



日じゅう雨はふったりやんだりをくり返したが、夕方になると、すっかり晴れた。

昼食後、二等船客の会がひらかれ、船のコックの中から選ばれた素人講釈師が余興をやった。

二十二日、朝七時、ふたたび霧が出たので、船は航行をやめた。船の位置は、大連から二六、七マイルのところだという。この日は、いままでとはうってかわって気温があがり、フランネル（やわらかい厚めの布）のシャツだと暑さをおぼえた。お昼ごろ、船はうごきだした。午後、二時十五分、大連の検疫停泊所についた。

午後三時、二葉亭は大連（たいれん）［タァリィェン］（中国東北地区南部——遼東半島の東端——シベリア鉄道に通じる鉄道の基点）に上陸した。

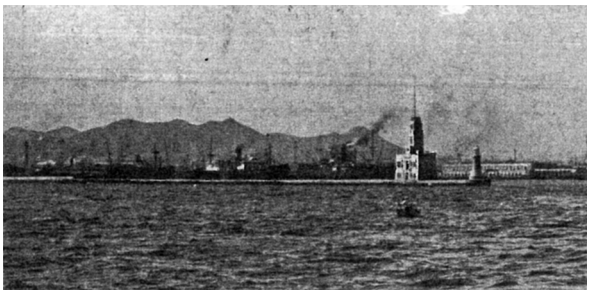
大連は、もともと小さな漁村にすぎなかった。が、その名を知られるようになったのは、一八六〇年（万延元）の英仏連合軍たるイギリス艦隊の根拠地として〝ヴィクトリア湾〟の名によってという。一八九八年（明治31）ロシアが租借し、自由貿易港となり、一九〇五年（明治38）から第二次世界大戦がおわるまで日本が占領した。大連港は築港という。緯度は日本の盛岡とほぼおなじである（『大連』大連港編纂所、大正14・12）。

市街は東西八キロ、南北約二七〇〇メートル。街区はロシア風につくられ、街の中央に円形の大広場をもうけ、街路は放射線状にの

びていた（『旅行案内』南満州鉄道株式会社、大正13・9）。

二葉亭の大連着は、濃霧のため一日おくれた。大連まで使った金の明細はつぎのようである。

旅費代……四二円
ボーイへのチップ……四円五〇銭
酒・炭酸水……三円四五銭
その他　　計四九円九五銭



大連港

かれは満鉄社員の世話により、遼東ホテル（信濃町）に一泊した。

このホテルは和洋両方の設備がある一流旅館であった。当時の宿泊料は不明だが、約十年後の大正六年（一九一七）当時、ひとり一泊二食付で二円～五円という（『南満州鉄道旅行案内』大正6・1）。

一　大連より満州里へ

二十四日午後七時、大連を出発した。大石橋（だいせっきょう）［タァシチァオ］（中国の東北地区南部――営口県の中心）に着いたとき、夜は明けかゝっていた。二十五日の夕方、西寛城子（長春の仮停車場）についた。たまたま北京で旧知の満鉄交渉事務局の鎌田弥助と会った。同夜、満鉄クラブに泊った。

長春（ちょうしゅん）［チァンチゥェン］（中国、東北地区中部、吉林省の省都。満州国建国時――新京といった）は、松花江支流の伊通河上流に位置し、緯度は北海道の旭川にひとしい。長春のまわりは一帯の広野である。いちばん暑いのは七月とされ、東京の暑さと大差ないが、夜になると涼風がふく。冬季は零下三〇度以下になることもある。

二十六日、長春市内を見学したり、三井物産の知人や正金銀行をおとずれたりした。銀行へ行ったのは換金の必要があったからか。当時の為替

レートは、

一〇四・四六銭――▶一〇〇ルーブリ

七三一・二五銭――▶七〇〇ルーブリ

注・「手帳」明治41年より。

同日の夜九時五十分ごろ、寛城子（クワンチョヌツー）（長春駅の北方一、六キロに位置。ロシア人がつくった駅。東清鉄道の最終駅）より東清鉄道――ロシアの汽車にのり、ハルピンにむかった。ハルピンまでの汽車賃は、九ルーブリ。手荷物代は、約一ルーブル。

寛城子よりハルピンまでの距離は二三〇キロ。急行で六、七時間の行程である。ハルピンの中央駅（新市街の西北端に位置）に着いたのは二十七日の午前八時半であった。到着後、直ちに日本領事館（新市街のボトルゴバヤ街）におもむいた。館員・杉野鋒太郎の一室に宿泊することになった。

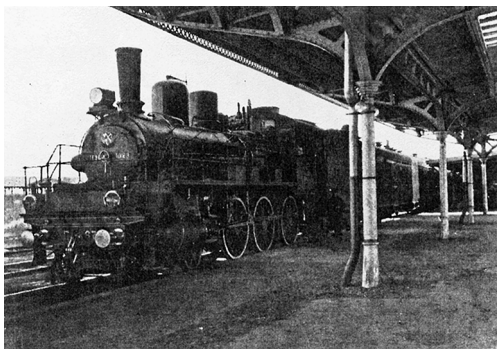
ハルピン（中国、東北地区北部――黒龍江省の省都。鉄道、河川交通の要衝）は、ロシアが一八九八年（明治31）東清鉄道の敷設基地として以

大正３年（1914）ごろの大連の駅舎

ロシア人が造った「大石橋」の駅

ロシア人が造った寛城市の駅。東清鉄道の基点。

ハルピンの街



東清鉄道の列車

来発展をとげ、のち日本に統治された。

ハルピンは北満州における最重要都市であり、松花江の河岸にできた街である。大正八年（一九一九）ごろの市の面積は、五平方露里（五二〇町歩）といい、松花江に接する低地に位置。ハルピンは、つぎの三区から成っていた。

埠頭区
旧市街……の商業区。各国商人の店が立ちならび、とくにキタイスカヤ街がいちばんの繁華街であった。
新市街……中央駅の東南に街区をなし、官舎や工場をなす。街区は整然とし、ヨーロッパのものを再現したような感をあたえた。

人口は、いちばん多いのは中国人。ついでロシア人、日本人はほんの一部であった。

大正八年当時の市の人口は、約十万以上であり、

ロシア人……四万五〇〇〇人

日本人……二二〇〇人

中国人は、ひんぱんに移動するので、正確な数は不明という（『朝鮮満州　支那案内』丁未出版社、大正8・10）。

夕方、河合宅（不詳）に食事に招かれた。

二十八日、河合とともに田中氏（不詳）に朝食に招かれた。二十九日、日本領事・川上宅で朝食の招待をうけた。同日の昼間、馬車でハルピンの旧市街を見物した。翌三十日は、朝からはげしい雨がふった。この日、つぎのような買物をした。

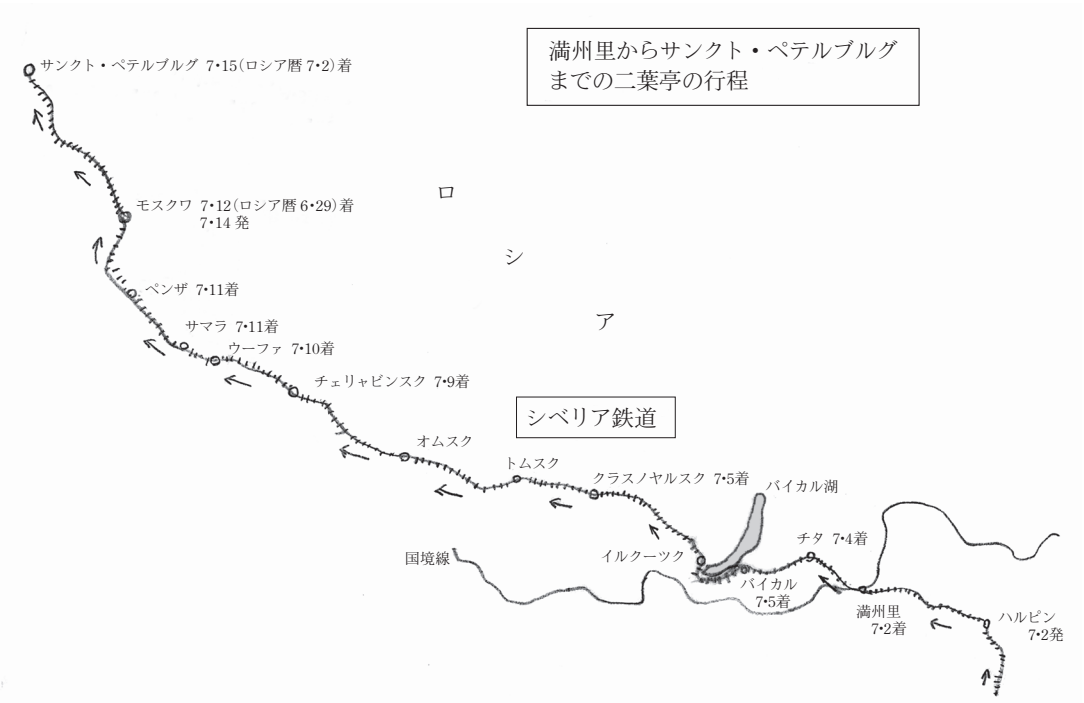
山高帽……五ルーブリ
蝶ネクタイ……一ルーブル一五コペイカ
名刺……二ルーブリ

七月二日――夕刻、ハルピンを出発。出発にさいして、食事をすませ、スープ・しぎのだんご・ハム・ビールなどを求めた。モスクワまで満鉄技師・富永忠一が同行した。新任の駐日ロシア大使マレウィッチと車中で会見した。海拉爾（現・内モンゴル自治区）を眠っているうちに通過し、三日の夜八時ごろ満州里［マンチョウリィ］（中国、東北地区北部、ロシアとの国境ちかくの町。シベリア鉄道の連絡地点）についた。ここで手荷物検査をうけたのち、ザバイカル鉄道に乗りかえた。

一　シベリア鉄道の旅

駅の売店でつぎのようなものを買った。

興安（安康――中国、西北地区東部、満州里の手まえの駅）案内……七〇コペイカ
茶、パイ……五〇コペイカ
葉書……二ルーブリ七五コペイカ



切手……六〇コペイカ
ラムネ、茶代……三〇コペイカ
チップ（ボーイに）……一〇コペイカ

四日、朝九時半ごろ、茶をのんでいるとき、チタ（一七世紀に起源をもつ古い町。デカブリスの流刑地として知られる。東シベリアの工業・文化の中心地）に到着。同十時出発。

汽車の停車ちゅうに、はじめて大阪朝日の編集部と家に葉書をだした。同日の夜九時ごろ、ペトロフスク（サラトフの北西一〇四キロ）についた。このとき茶、パンなどを求めた。同行の富永の健康すぐれず、茶をものまなかった。五日（日曜日）の午前八時、タイホイに着き、富永におこされた。

マリッエイ――フヴォーイナヤ間で地くずれが起り、汽車は不通になった。夕方、七時ごろ、新列車にのりかえた。夜九時ごろ、汽車はイルクーツクにむかってうごきだした。この日、昼食は出なかった。食糧のたくわえは、すべて消費されたからである。夜、十一時十分まえ、バイカル駅（船、鉄道の要地）についた。

停車場は、バイカル湖（長さ六三五キロ、幅四八～七九キロ、世界最深［一六二〇メートル］の淡水湖）に突きでた波止場にあり、湖上に連絡船（冬場、砕氷船として用いる）を浮べていた。

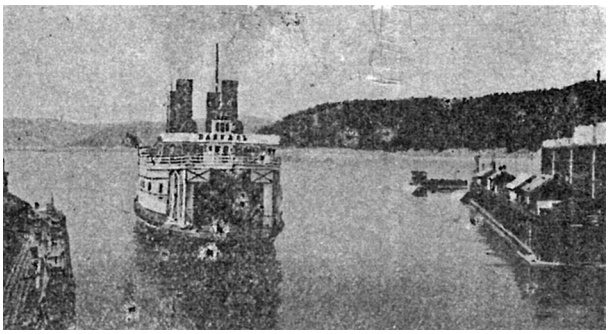
二葉亭は、バイカル駅で茶をのみ、ロシアまんじゅうを食べた。このとき、妻・柳子や坪内に葉書をだした。

五日、バイカル湖畔を通過し、午前一時半ごろイルクーツク（イルクーツク州の州都。一八世紀以来東シベリアの行政・経済の中心地）に到着し、三〇分後発車した。六日、八時ごろおき、紅茶とパンをとった。午後一時ごろ、暑気をおぼえた。

夕方の七時ごろ、かなり大きな川にかかる鉄橋をわたった。この川の名についてかれは何もふれていないが、おそらくウダ川のことか。車窓からみる河畔の景色はひじょうに美しいものであった。また終日、路ぼうに鳳仙花（つりふねそう科の一年生植物。紅、白などの花が咲く）をみた。こういった風景をたん能したのは、ニジネウディンスク（イルクーツクの北西五〇六キロに位置し、ウダ川沿岸の町）に着くまえのことである。夕方、七時半、ニジネウディンスクについた。

昨日もきょうも天気がよかった。ロシアに帰化したオーストリア人の旅客と知りあい、朝一時まで歓談した。

夕食……二ルーブリ一〇コペイカ



バイカル湖と砕氷船

イルクーツクの全景

ボーイにチップ……四〇コペイカ

計二ルーブリ五〇コペイカ

七日、八時起床。富永は快方にむかってきた。

この日グリュクヴェンナヤ――クラスノヤルスク（12・45着）――アチンスク（夕方6着）などを通過した。お昼ごろ、食堂車で酒をのんだ。のちオーストリア人の車室をたずねた。

八日、八時に起床した。雨がふったが、すぐやんだ。午前十一時四十分、オビに到着。このとき停車時間がみじかいことに気づかず、すんでのことでプラットフォームに取りのこされるところであった。お昼ごろ、暑かったが、午後四時をすぎるころ涼しくなり、六時になると寒気をおぼえた。北方の地平線上に赤や黄色

「オテル・メトロポール」（モスクワ）の側面

シベリア鉄道のモスクワ駅

の光彩をみた。八時二十分、カインスクに着いた。

九日、ベッドを離れたのは、九時十分すぎであった。ちょうどペトロパブロフスク（ロシア南部、オムスクの西約二六〇キロ、イシム川中流右岸に位置）に着いたところであった。夕方五時、入浴した。入湯料は二ルーブリ。フロ番にチップ五〇コペイカやった。夜八時四十五分、チェリャビンスク（スベルドロフスクの南約二〇〇キロに位置）に着いた。

十日、7時半すぎアシャ――バランショフスコイに着いた。が、寒く、寒暖計は一〇度をしめしていた。旅行案内『モスクワ――バイカル』を求めた（四五コペイカ）。列車の車掌長と面談した。夜八時半、ポドヴィストネヴォ駅を通過した。十三夜（陰暦　九月十三日の夜）の月のようなものが夜空に出ていた。

午前九時十五分ウファ（ロシア西部――森がある丘の町）[3]についた。

この日、二葉亭は、妻と『東京朝日』に絵葉書をだした。東京宅へは、「ウラル山の先のウファといふ処（ところ）に着いた　こゝはもうヨーロッパだ　辰之助」。『東朝』の編集部へは、「十日　午前九時半ウファ着　長谷川辰之助」といったかんたんな文面である。

十一日、サマラ（のちのクイビシェフ――ボルガ川にのぞむ町）を通過するころ起床した。十時半、ペンザ（ロシア西部、ニジミ・ノフゴロド――現・ゴーリキの南約三五〇キロ、スラ川上流の町）に着いた。ここはかなり大きな駅であったという。プラットフォームはコンクリート製、食堂には十六人用のテーブルがならび、ほかに二人がけのソファがあった。聖像（イコン）があり、そのまえにローソクがあげられていた。

郵便局の職員と会って話をした。車掌にチップとして五ルーブリあたえた。

七月十二日（ロシア暦6・29）――午前三時四十五分、モスクワに到着した。気温十六度であった。駅（「ヤロスラヴリ駅」一九〇二年の建設、シベリア鉄道の起点駅または終着駅）から旅宿の「オテル・メトロポール」Hôtel Métropole（劇場広場にちかい一流ホテル。現存）までは馬車でいった。同ホテルで旅装をとき、フロに入り、一睡したあと、市内を見学した。夜、九時半富永をニコラエフ駅（一名サンクト・ペテルブルグ

駅）に見送った。

十三日、九時に起床し、レストラン（ホテル内？）で朝食をとった。

紅茶二杯　卵二コ　パン　計七五コペイカ

のち平山整治（不詳）とともに河野通久郎（一八七六～一九五一、日露貿易業者。新劇俳優・東山千栄子の夫）を訪問。午後、四時、『ロシアの言葉』編集部を訪れ、ブラゴア記者と知りあった。ついでソボレフスキー記者を『ロシア通信』編集部にたずねたが、同人はすでに帰宅したあとであった。

夜、八時ごろ、ハンカチを買いに出たが、どこの店も閉っていた。物乞いと会い、相手と二言三言ことばを交わした。道にまよい、オテル・メトロポールの前を通ったが、それと気づかなかった。

十四日、ダンチェンコを訪ねたが不在であった。かれは南の別荘に行ったとのことであった。ホテルにもどる途中、ハンカチを一ダース求めた（八ルーブリ四〇コペイカ）。午後四時、『ロシアの言葉』を訪ね、ついで『ロシア通信』を訪問し、ソボレフスキー記者と会った。同人に原稿を送ることを約束した。この日使った金およびホテルへの支払いは、つぎのようなものであった。

昼食代……二ルーブリ七〇コペイカ
馬車代……一ルーブル三〇コペイカ
ホテルの諸費用……一一ルーブリ七〇コペイカ
ホテルの従業員へのチップ（茶代をふくむ）……一〇ルーブリ
警察の手数料……一ルーブル
ポーター……一ルーブル

ほかにサンクト・ペテルブルグまでの汽車賃……二六ルーブリ五〇コペイカ

同夜、九時半、二葉亭はニコラエフ駅より夜行にのり、サンクト・ペテルブルグ（モスクワの北西七〇〇キロに位置）にむかった。

十五日（ロシア暦7・2）午前九時半ニコラエフ駅（現・モスクワ駅）に到着し、「オテルダングルテール」（「イギリス・ホテル」ヴォズネセンスキ通り十番地にある四層のホテル。イサーク寺院のむかい側に位置。のちの「レニングラード・ホテル」。一九八七年（昭和62）三月に解体）にひとまず身を落ちつけた。そこは一流ホテル[4]であるため、部屋代は一日五ルーブリ要し、このほか食事にも五ルーブリかゝるため、早く下宿を捜す必要があった。

ペテルブルグのニコラエフ駅
（現・モスクワ駅）

当初の予想に反して、道草をくい、大連・ハルピン・モスクワなどに逗留したこともあって旅費がひじょうにかさみ、かなりの額を散財したからである。

部屋に荷をおいたのち、二葉亭は日本大使館（当時はネバ川河畔の一四番地にあった）におもむいた。このとき内閣の更迭（第二次桂内閣の成立）を耳にした。昼食はモスクワで別れた富永ととった。

十六日、一日じゅう部屋をさがしたが、てきとうなのが見つからなかった。山口（不詳、ガガーリンスカヤ街一四号館の一九に住む）と朝食をとり、三ルーブリあまり使った。昼食は、日本大使館の通訳官・上田仙太郎（一八六七～一九四〇、ペテルスブルク大卒。『朝日』の特約通信員）といっしょにとった。かれは二葉亭の分を払った。のち武官の田中中佐（キロチナヤ街三〇号館）を訪ねた。

十七日、午後ルマーノフ宅をたずね歓談した。十八日、ホテルに二一ルーブリ八〇コペイカ、ほかにホテルの門番・給仕・ルームメード・廊下番・ボーイなどへのチップとして一一ルーブリ五〇コペイカ使った。

一　ペテルブルクの貧民横町に下宿

この日、かならずしも気に入ったわけではないが、下宿先をきめ、引き移った。入居にさいして、貸主の代理人である門番に、四〇ルーブリ

（7・5〜8・5までの部屋代）支払った。住所は――

ストリャールヌイ横町　一三号館の四〇である。

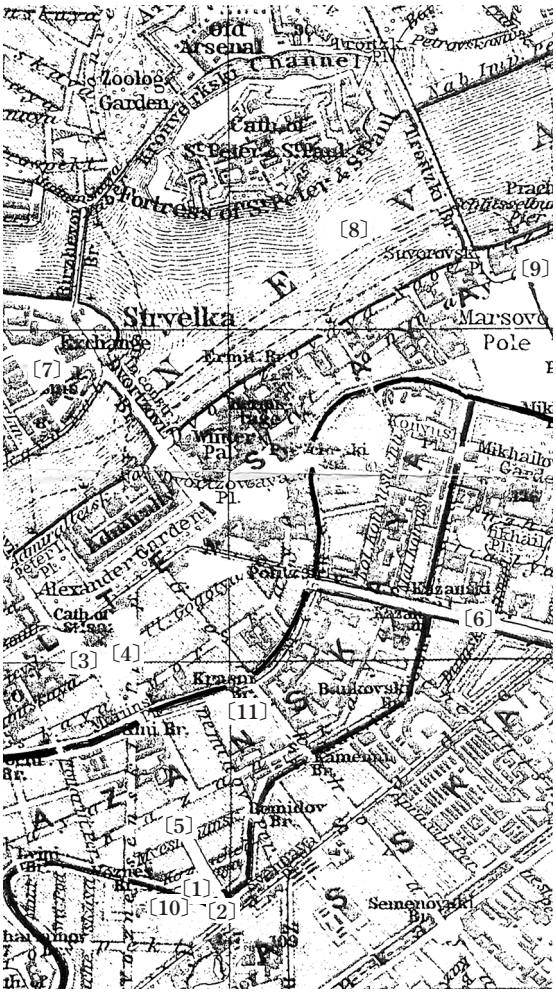
注・「手帳」21による。

夜、富永はヴァルシャフスキー（ワルシャワ）駅より、出発した。二葉亭は白鳥（不詳）とともにかれを見送った。下宿にもどったのは、夜十二時をすぎていた。

かれは翌年三月十八日、肺病のためワシーリエフスキー島の病院に入るまで、この下宿に滞在した。

二葉亭が居をさだめた〝ストリャールヌイ〟横町は、この語のいみ「指物師（箱や机といった家具や錠のような器具をつくる職人）」がしめすように、職人の街であった。かれがみつけた下宿は、市の中心にあったが、当時その界わいの住民は、下層民であった。建物にはさまざまの貧し

ペテルブルグの二葉亭の下宿



〔1〕二葉亭の下宿（ストリャールヌイ横町13号館の40）
〔2〕コクーシキン橋
〔3〕イサアーキ大寺院
〔4〕イギリス・ホテル
〔5〕ストリャールヌイ横町
〔6〕ネフスキー大通り
〔7〕ワシーリエフスキー島
〔8〕ネバ川
〔9〕夏の公園
〔10〕エカテリーナ運河
〔11〕モイカ運河

正面の建物―二葉亭の下宿。
コクーシキン橋をわたった左角地に位置。

い人間が雑居していた。

職人――商人――仕立屋――錠なおし――コック――小役人――ドイツ人（蔑視されていた）――売春婦――旅職人など。

いまでこそ十三号館とその付近の五、六階の建物は、きれいに改装されているから、むかしのように暗い、陰うつな印象をあたえないが、当時は重苦しい空気がただよっていたようだ。居住者は、二つある戸口から建物に出入りした。

帝政時代のロシア社会は、上流と下流しかなく、中流はなかったというし、貧富や貴賤の差も大きかった。[5] また建物の一階には、貧しい住民を客とする商店、酒場、食堂、娼家があった。

二葉亭が異邦人としてくらしたストリャールヌイ横町と十三号館の建物、さらに付近の街巷（がいこう）（ちまた）は、かれが愛読したドストエフスキー（一八二一～八一、ロシアの小説家）が描いた『罪と罰』（一八六六年）の世界をほうふつさせる所でもあった。

小説『罪と罰』は、主人公のラスコーリエコフが、七月上旬のあるむしあつい夕方、S横町にある五階建の屋根うら部屋を出ると、K橋のほうにむかうところからはじまっている。このロシア小説をはじめて英語から重訳した内田魯庵（一八六八～一九二九、明治期の評論家・小説家）の『魯国 日本 ドストイエフスキイ 作 不知庵主人 訳 小説 罪と罰 巻之一』内田老鶴圃、明治25・11）には、S横町は「S……（なにがし）『ペレウーロク』（横町）」として、またK橋は「K……（なにがし）橋」となっていて、いずれもはっきりと町筋（まちの通り）や橋の名を明記していない。原作者のドストエフスキーが伏せているからであろう。

おそらくドストエフスキーは、S横町を、ストリャールヌイ　ペレウーロク Столярный переулок の〝C〟から、K橋は Kokushikin の〝K〟から採ったものであろう。ラスコーリニコフの住居は、コクーシン橋からカザンスカヤ通り Kazanskaya にむかって歩いて二本目の通りにあたるメシチャーンスカヤ Myeshchanskaya 街とストリャールヌイ横町が交わる角地の建物（現・グラジダーンスカヤ街）と考えられている。

そこは二葉亭の下宿の建物から三、四分ぐらいのところという。[6]

二葉亭が九ヵ月ほどくらしたこの下宿は、現存する。それはエカテリーナ運河（グリボエードフ運河）にかかるコクーシキン Kokushikin 橋をわたった角地（三角形）にある、〝軍艦〟のような形をした五階建の建物である。かれの旧居はストリャールヌイ通り（横町）に面したその建物の二階にあり、四〇号がその部屋であった。

その建物は、一九世紀初頭にA・G・クシェレフ・ベズボロトコ伯爵によって造られ、二〇世紀のはじめ別人の所有になったものという。(7)

露都における二葉亭の旧居をおとずれた日本人はかなりの数であろうが、その訪問記を活字にして報告した者は、それほど多くはないようだ。いまそれを列挙すると、つぎのようになる。

渋川玄耳（一八七二～一九二六、明治・大正期の著述家、ジャーナリスト）……「露都に於ける二葉亭」『薮野梁十　日本と世界見物』の附録に所収、誠文堂、大正6・6。

中村光夫（一九一一～八八、昭和期の評論家）……「レニングラードの二葉亭」『朝日新聞』（夕刊、昭和46・11・17付）。

畑　有三（一九三四～二〇一四、共立女子大学教授）……「ロシアの二葉亭」『共立女子大学文芸学部報』昭和49・1・20所収、未見。

安井亮平（一九三五～、早大名誉教授）……「ペテルブルクの二葉亭」『濤波通信』所収、昭和59・12～同62・9まで七回のせた。未見。

〃　「ペテルブルクの二葉亭――下宿のこと、ジェのこと、ホテルのこと、その他」『共同研究　ロシアと日本　第2集』所収、平2・3。

十川信介（一九三六～、学習院大学名誉教授）……「ペテルブルクの二葉亭」『図書』所収、平成13・11。

渋川玄耳（一八七二～一九二六、本名・柳次郎。ペンネームは薮野梁十。東京法学院（現・中央大学）中退。高文、弁護士試験に合格。明治四十年当時、『朝日新聞』社会部長）は、二葉亭の病状が悪化する明治四十二年（一九〇九）三月、老後の思い出に世界旅行に出、欧米各国を巡覧した折、陸路ドイツよりロシア入りをした。

渋川玄耳

同年六月二十日の午後――小雨ふるはだ寒い日、渋川は通訳の清水三三（さんぞう）（一八八〇～一九五六、札幌露清学校、東京外国語学校、ペテルブルク大法科にまなぶ。ハルピン学院、北満学院で教鞭をとったのち、戦後生地・山梨の開拓民となる）をともなって二葉亭の旧宅をおとずれ取材した。その報告が「露都に於ける二葉亭」である。

中村光夫は、「二葉亭四迷論」（一九三六年）をもって文学界賞を授賞し、新進評論家としてデビューしたが、その研究歴はながい。レニングラード（当時の呼称）にいった機会に、二葉亭の遺跡をさぐって報告したのが「レニングラードの二葉亭」である。渡露のまえにロシア文学者・安井亮平（早大教授）から、二葉亭の下宿した家のことをうかがい、中島副領事とともに訪れ、さらに二日後女性通訳をともなって再度おとずれた。

それは廊下からすぐ入ると、「広い部屋で、少し使いにくそうですが、静かな往来に面して明るく、廊下やほかの部屋が乱雑なのに、ここだけは小ぎれいに片づけられていました」という。当時の住人は、サラ・カツマンという引退した女性化学者。一九二六年（昭和元年）からここに住み、第二次大戦ちゅうレニングラードが独軍に包囲されたとき、夫と息子は、ここで餓死したという。

畑　有三は、昭和四十八、九年（一九七三、七四）ごろ、この下宿をおとずれている。が、部屋の大きさは五、六坪とみている。[8] 安井亮平は、昭和四十五年（一九六八）と四十九年（一九七四）の夏に二度、ここを訪ねたが、いずれもあいにく住人が不在で、部屋をみることができなかった。十川信介は、安井亮平から紹介された女性通訳二名とともに、「うす暗く、くずれかけた階段を上って」、四十号室のがんじょうなドァのまえにたどり着いた。当時の住人は、五〇歳台のバスの運転手の家族六人であった。幸い主人は非番で在宅していたので、中に入れてもらえた。その報告が、「ペテルブルグの二葉亭」である。

どの報告もおもしろいのだが、文字だけの説明だと具体的なイメージをつくることがむずかしく、写真や図や地図が添えられていると理解しやすい。筆者などはなるべくモノグラフ（研究論文）に、写真や図を入れるようにしている。

渋川、中村、畑、安井、十川ら五名の文章のなかで、写真が添えられているのは、中村と十川のものだけである。中村の記事（『朝日』夕刊、昭和46・11・17）には、コクーシン橋をわたり、エカテリーナ運河（グリボエードフ運河）から撮った建物の全体像（じっさいは半分ほど）が添えられている。十川論文（「ペテルブルグの二葉亭」『図書』所収、平成13・11）には、十三号館の入口の写真が一枚と二葉亭がくらした部屋の見

取図が一枚そえてある。いずれも貴重な資料である。

旧ソ連時代、いまとちがってめったやたらとカメラをむけて撮影するとスパイとみなされただろうし、用心して写真を撮らなかったものであろう。

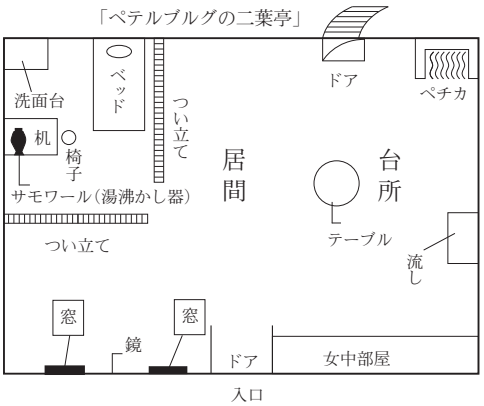
さて二葉亭が入居した当時、部屋はどんなようすであったのか。

住居となったのは五階建ての往来に面した二階の一室であった。部屋の大きさは——

十畳敷ぐらい……二葉亭四迷
広さは十五、六畳もあらん……渋川玄耳
五、六坪……畑　有三
いま風にいえば二十五、六平米……十川信介

二葉亭四迷の居室内の想像図。

参考資料：十川信介「ペテルブルグの二葉亭」



と、はっきりしないが、要するにいまならワンルームマンションといったところである。

一ヵ月の部屋代は、四〇ルーブリ（邦貨約四〇円）。朝はパン、紅茶、カンズメ（イワシ）[9]といったかんたんなもの。晩飯をたのむと、六〇コペイカほどかゝった。のちに五十歳代の女中のオリガがいろいろ世話をしてくれた。二葉亭は倹約して一ヵ月六、七〇ルーブリでくらすつもりであった。

かれの部屋のようす、家具調度はどうであったのか。玄関を入って、すぐ右手にあるのは女中部屋（畳をタテに二枚つないだほどの細長い、くらい所）である。部屋の右手が台所、左手は居間。台所には小さなドァがあり、そこから鉄の階段をおりて外に出られる。台所のすみに、白いタイル張りのペチカ pechka（暖房装置の一種。レンガや粘土できずいたもの。石炭やまきを燃やし、部屋をあたためる）がある。窓は二つ、廊下側にある。

居間のすみに洗面台があり、そのわきにベッドをおいたものであろう。そしてベッドをついたて（仕切り）のようなもので囲ったという。姿見（すがたみ）（二つの窓のあいだにある）をのぞいて、家具（机、椅子、ベッド）はついていなかったので、あとで購入せねばならなかった。下宿生活をはじめると、いろいろ必要なものが出てくるが、かれは毛布・下着・座ぶとん・机・折たたみ式ベッド・ランプ・ペン・インクなどを求めている。その代金として八〇ルーブリほど使った。

トイレは部屋になく、共同トイレであった。それは廊下の突きあたりか、階段ちかくにあったものか。

部屋にはとくにこれはといった飾りつけはなく、質素なものであった。二葉亭が借りたこの部屋は、海軍将校の未亡人がまた貸ししたものだった。かれが入居したころ女主人は、田舎に行っていて（避暑のため？）留守であり、門番がいっさいを託されていた。女主人が女中のオリガとともに露都にもどったのは、九月二十日すぎのことである。

だから二葉亭は、二ヵ月ほど食事を近所の食堂やレストランですませたようである。

かれがロシアに来て、日本と大きな違いがあると思ったのは、気候であった。日本なら暑さを覚えるのに、外出しても汗をかゝぬことであった。露都に着いたとき、東京見物のお上りさんのように、キョロキョロしどおしであったという。夜九時ともなれば、そろそろ屋内に電気をつける必要はあったが、すっかり暗くなるのは十一時すぎである。ところが二、三時間して、午前二時ごろになるともう夜が明けるのである。

夏は諸官庁が休暇をとるため、市民の多くも田舎に出かけ、市中はさびれるが、往来は馬車の音がたえることがなかった。

一　〝白夜〟による不眠症

下宿に移って四、五日すると、二葉亭は不眠症に苦しむようになった。いわずもがなの〝白夜（ベーラヤノーチ）〟のせいである。かれは下宿に移った晩から眠れなくなり、やむなくブドウ酒、コニャック、ウォッカを一杯引っかけ、その勢いで寝ようとするが、二時間ほどすると酔いがさめ、また眠れなくなる。そのため頭は始終もうろうとしている。とても通信文をかくどころではない。ロシア紙をよんで、電報を打つのがやっとである。

不眠状態が二、三日つづくと、突然ねむけにおそわれ、一晩ぐっすり寝れる。が、その翌晩からまた眠ることができない。そのため神経症のようになり、体は衰弱するばかり。ネフスキー大通で四、五度も卒倒しかけた。そのため日本大使館のほうでも心配し、国へ帰れという。が、一万露里のかなたからやって来た身、不眠症にかゝったからといって、おめおめ日本に帰れるものではなかった。

かれは大使館の上田通訳官と親交があり、佐藤尚武（一八八二～一九七一、のちソ連大使、戦後参院議長）は、外交官補時代に、上田の紹介で二葉亭と会っている。「当時かれは健康がすぐれず、ひじょうに神経質になっていて、夜ねむれなくて困ると、しきりにこぼしていました」と談話筆記のなかで語っている（佐藤尚武所述『二つのロシア』世界の日本社、昭和23・7、一九頁）。

二葉亭の日常生活は、どのようなものであったのか。女中オリガは、かれが夜ねむれない、とこぼすので、医者にみてもらうことを勧めても、前からの癖だといって医者にかゝらなかった。かれは明け方に寝て、翌日の午後二時から四時ごろ起きた。起きると、お茶（奥方が日本から送ったもの）をのんだ。それがかれの朝食であった。玉子焼きに大根おろしをかけたものを好んだ。

日本茶にあきると[10]、ココアやコーヒーをのむことがあった。食事についていえば、晩の六時ごろ昼食をとった。もともと酒はのめなかったが、人から勧められて、食後にすこしビールをのむこともあった。が、それでも眠れなかった。

食物としては、肉類がきらいであり、野菜を好んだ。生のロシアきうり（ずんぐりし、短かく、種子はすくなく、身がしまっている）が好物であった。のちにオリガに米をたいてもらった[11]。夜十一時ごろになると、夜食をたべたというが、どんなものを口に入れたのか不明である。昼食に〝すっぱいシチュ〟を好んで食べたというが、これは〝ボルシチ〟（牛肉や野菜などを煮込み、そこへ赤カブ［ビーツ］を加えた、赤色のスープ）のことであろう。

日本大使館　参事官
上田仙太郎

あるとき二葉亭は、ロシア士官をともなって帰宅した。かれはその士官にコニャック（ブランデーの一種）をだし、オリガにきうりを持ってくるよう命じた。かれはお茶や食事のとき、酒を飲むときにも、よくきうりを食べた。オリガはこんなことをいった。下層階級の人間がウォッカといっしょにきうりをかじるのはよいが、士官は紳士である。コニャックには、それにふさわしい肴が必要です。下女がコニャックの肴にきうりを出したとあっては、人から笑われます、と。

すると二葉亭は、

――きゅうりは下等なものか。日本では皇帝（天皇）の食物だぞ。

と、ほらを吹いた。

女中のオリガは、かれがふだん何を食べたかノートに記していたが、他の不用品といっしょにそれを焼いてしまったという（渋川玄耳「露都に於ける二葉亭」）。

二葉亭は、白夜のせいで昼と夜の生活を逆にしたようにくらし、三、四日の不眠のあと、長眠病（十二時間ほど、ぶっ通しでグッスリねる）にかかった。こうした異常な生活をつづけること半年、十二月すえごろになると、変則的生活にもなれ、また神経衰弱もなおりかけてきたようでもあるが、完治したわけではない。七月中旬、露都に到着後、あまり方々に手紙や葉書を出さなかったが、年のくれになるとあちこちに便りをするようになる。

日本人が外国でくらすと、言語不自由なこともあって、同国人どうしがかたまり、うちにこもり、外部との交際や交流をしない傾向がみられる。が、二葉亭は露都の邦人やロシア人との付きあいをいとわなかったようだ。かれの「手帳」から、邦人名をひろうと、つぎのようになる。が、どんな人物なのかわからぬことが多い。

田中中佐……駐在武官。キロチナヤ街、三〇号館。

山口……二葉亭がサンクトペテルブルクに着いたとき、この者の出迎えをうけた。ガガーリンスカヤ街、一四号館の一九。

浜村少佐……駐在武官。ニコラーエフスカヤ街、五五号館の一六。

高柳保太郎（一八六九～？）……陸軍歩兵中佐。公費による個人視察。

柏木秋江……生没年不詳。満鉄留学生。二葉亭は、同人と昼食をとっている（明治42・1・14）。

萩野末吉大佐（一八六〇～一九四〇、明治・大正期の軍人）……駐在武官。二葉亭は、日本大使館で同人と知りあった（明治41・7・15）。のち陸軍中将。

富永忠一（一八七三～？）……東京帝大の工科を出た、満鉄の鉄道技師。二葉亭は、同人と昼食をとった（明治41・7・15）。

田中清次郎（一八七二～一九五四）……満鉄理事。明治二十八年（一八九五）東京帝大法科大学卒。露都における日満露の連絡運輸会議に出席するために当地にやって来た。のち満鉄調査部をつくった。

夏秋亀一（なつあきかめいち）……生没年不詳。満鉄社外理事。
鈴木乙菟平（おとへい）（？～一九二三）……二葉亭は、同人を訪ねている（明治42・1・29）。
落合謙太郎（けんたろう）（一八七〇～一九二六）……ロシア大使館参事官。のち駐イタリア大使。二葉亭の病気が悪化したとき、塩田外務書記官とともに下宿に日本食をとどけた。
川上俊彦（一八六一～一九三五）……ドイツ留学途上の梶浦海軍軍医を二葉亭の下宿に案内した人。のち駐ポーランド公使、日魯漁業社長。
福田……不詳。二葉亭は、この者と昼食をともにしている（明治42・3・4）。
清水三三……参謀本部留学生、東京外語における教え子。
鐘ヶ江正明（かねがえまさあき）……鉄道院の技師。プーシキンスカヤ街、三号館の三一。
小田切中佐……駐在武官、プーシキンスカヤ街一〇号館。
末永一三……大阪商船会社代表（のち副社長）。
加藤、郷家……ネフスキー大通り、五四号館ペンション［ローマ］二三号室。
浜西少佐……ペテルブルクスカヤ区シローカヤ街、二〇号館一三。海軍軍人・探検家。
郡司成忠（しげただ）（一八六〇～一九二四）……駐在武官。ペテルブルク、ノーワヤ・ジェレーヴニャ　サヴェスカヤ街　一九号館の四。
小田切万寿之助（ますのすけ）（一八六八～一九三四）……明治期の外交官。のち横浜正金銀行の顧問となり、満州の統轄責任者となる。
中尾秀男……外務省留学生。
桜井……不詳。
鎌田、成瀬……不詳。
石井　徹……明治二十九年（一八九六）東京帝大政治科を卒業後、日本郵船に入社。のち副社長となる。

ほかに、日本大使館の関係者で二葉亭と親交があったのは、通訳官・上田仙太郎をはじめ、外交官補・松島　肇や佐藤尚武などであった。

また知り合いになったロシア人は、マスコミ関係が多いが、つぎの人々がそれである。

『ロシア新報』関係者――ソボレーフスキ（記者）。アスーチン（教授）、ロマーノフ（書記）。

『ロシア紙』関係者――ヴォリフ男爵夫人（委員会長）、パシテ及びドブロニースキー（副会長）、ビルバソフ（事務局長）、セメハ（副官）。クロヴェーロフ（医師）、アレクセーエ（『ルーシ』の記者?）、ゲッス（国会警護官補）、くわしくわからない人物に、エゴーロフ、ベルナル、ロマーノフ、ブラーゴフ、ヴィリヤムス、ベンガル、ベイナル、ピウスツカ、ピオトロフスカなどがいる。

入院したアレキサンダー病院（ワシーリィスキー島）の医師に、ネイマン、モリツなどがいる。

川上俊彦
『川上俊彦君を憶ふ』
（非売品　昭和11・7）より。

何んといっても二葉亭が、ふだんいちばん親しく接していたのは、女中と門番一家であった。

老婢オリガ――海軍士官の未亡人付の女中。当時年齢は五〇余り。容色はおとろえ、白い顔のおばあさんであったという。二葉亭の身の回りや食事の世話をした。

門番一家　亭主　マツウエイ・ペトローウィッチ・ペトロフ（年齢は七〇）
　　妻　アレクサンドル・イワーノフナ・ペトルノワ（年齢は不詳）

この夫婦には、娘が二人あった。すなわち――

長女　ジェーニャ（当時二三歳）
次女　リューバ（当時一六歳）

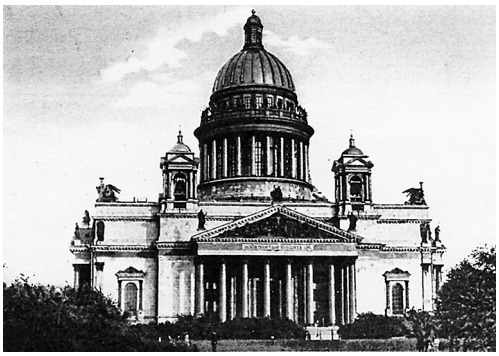
二葉亭は、この一家から〝ウラジミル・ペツローウィッチ〟というロシア名をちょうだいした。〝ハセガワ〟というのはロシア人には呼びにくいので、娘たちが相談してこの名前にしたらしい。

身分や階級のやかましい帝政時代のロシアにおいて、いやしくも紳士たる者が、門番にたいして必要以上のことばをかけたり、交際することは絶無のことであった。

ところがかれはこの門番とその家族にしたしみ、やがてその家に入りびたるようになった。「先生（二葉亭）は門番などのように単純で素朴の下流社会の生活に興味をもたれて研究して」いたという（清水二三「恩師二葉亭四迷の想い出」）。

かれは世にうずもれ、人に知られず生きている人間、一般大衆を愛した。ロシアの文学者が取りあつかう社会現象（人間の社会生活や社会関係にもとづいて発生するさまざまな現象）を観察し、それを解剖することに興味をもつようになり、そこからさらに実社会や人生にたいする態度、人間の運命について考えるようになった。つまり社会学的になったということである。

建物内の日のあたらない、うす暗いところで人の出入りを監視したりする仕事についている門番一家としたしんだのは、社会的関心のつよい小説か何かの研究資料をえるためであったようだ。入院後、かれは姉妹に、帰国したら本をかくが、その中にお前たちのことが書いてあるから、すぐ送ってやるといったという。すでに腹案があったようである。



イサアーキ大寺院

八、九月の復活祭のときは、この一家とともにイサアーキ大寺院に出かけたし、正月もみなとこの寺院に参詣した。そのときかれは、

――じぶんは十字を切ることを知らないが、いっしょに行ってもよいか。

と、いった。

――差しつかえありませんよ。

というと、いっしょに行くことになったという。

イサアーキ大寺院もうでは、夜十二時に出かけたもので、帰宅後、門番のところで夜食をとった。そ

の後、午前四時に床につき、翌二日の午後四時に目ざめた。
二葉亭は、毎日門番の家に顔をだし、家族とはなしをするから、しぜんかれらの動向がわかる。姉のジェーニャが友だちと芝居見物のことを相談しているのを聞いて、
――わたしもいっしょに行ってよいか。
と、いうから、
――いいですよ。
と、いったら、それなら行こうということになり、同行することになった。このときオリンピア座で「ゲイシャ」というのをみた。
この姉妹は、いつも安い立ち見席でみていたが、二葉亭にはそれがくるしいものであった。姉妹と芝居をみに出かけたのは、二度だけであった。そのつぎに行くとき、かれは
――ひとつ条件がある。
といった。
――何でしょうか。
とうかがうと、
――こんどは立ち見はしない。わたしが金をだすから、桟敷（さじき）（ボックス席）に入る。
といい、みなを連れて上等の席で見物した。
二度目のときは、ブック座で「恋の夜」という劇をみた。
二葉亭は、きれいとはいえぬ門番宅で、よく茶をのんだり食事をした。下層階級の家庭では、銀製の食器を用いることはなく、ふつう
木製のスプーン
木製の肉刺し（フォーク）
を使った。が、かれはそれをいやがらず、門番一家とおなじものを用いて食べた。
紅茶にはジャムを入れず、いつもレモンを切ったものを入れて飲んだ。日本から甘いもの（甘納豆――豆をゆで、とうみつで煮つめ、砂糖をま

ぶした菓子）やあられ（さいの目に切って味をつけたもち）などが送られてくると、この一家にわけあたえた。日本語の〝甘い〟という語のことを、門番一家は知っていた。

この家族の家に、多少二葉亭の遺物がのこっていた。

金属性のわくの付いたコップ（紅茶を飲むとき用いる）
敦賀ホテルのマークが入ったタオル
巻タバコ入れ
ロシア語の古新聞（露都の婦人記者がかいた、二段ほどの記事がのっている。二葉亭の「浮雲」「平凡」にふれたもの）
写真　二葉亭のポートレイト（明治41年11月に、露都で冬帽をかぶり、外とうを着て撮ったもの）
絵葉書（姉妹にあてて出した入院中と帰航中の数枚）
小箱（妹のリューバがもらったもの。ゆびわ一つ、ピンが一本、あられ三つぶが入っているもの）

クリスマスのとき、二葉亭は、門番のところに呼ばれ、ごちそうになった。じぶんの部屋にもどると、女中のオリガが祝儀をもらったお返しに、自腹をきってまたごちそうしてくれた。おかげでかれの腹は、はち切れそうになり、散歩がてら外に出て、妻・柳子に絵葉書をだした（明治42・1・7付）。

明治四十一年八月一日――午前八時二十五分、ロンドンより帰国途上にある外相・小村寿太郎（一八五五～一九一一、明治期の外交官）は、露都に到着した。このとき二葉亭はワルシャワ駅に出迎え、十時半ごろ東京朝日新聞社にその到着を打電した。明治三十九年（一九〇六）六月、駐英大使に任じられた小村は、二年ほどロンドンでくらしたのち、第二次桂内閣の外相となり、帰国することになった。

かれはロンドンを発し、ドーバー海峡をわたり、大陸に上陸すると、ウイーン経由で露都に入った。二葉亭が駅舎に小村を出迎えたのはこのときである。サンクト・ペテルブルグ滞在中、外相イスヴォルスキーその他の有力者と会見したほか、[12]ポーツマス会議の全権であった旧知のヴィッテ（一八四九～一九一五、ロシアの政治家。伯爵）をその閑居にたずね歓をつくした。

九月二十八日（ロシア暦9・15）、かれはメドヴェージ村（露都から汽車で、三、四時間のところ）におもむき、日露戦争のときの日本人捕虜

約七〇名の遺骨返還の改葬式に参列した。二葉亭の知友・河野通久郎は「本邦俘虜ノ遺骨送還等ニ付尽シタル功顕著ナリト」のことで勲六等瑞宝章をさずけられた（『賞勲局百年資料集　特別叙勲類纂（生存者）下』大蔵省印刷局、昭和57・5）。

この日、二葉亭は外語の教え子・清水三三とともに、午前五時ごろウトルコシを出発し、六時半ごろメドヴェージ村に着いた。このころかれは毎日のように東京の『朝日』に打電している。電報の内容は、内外情報（ロシアの国家予算、国際展覧会、国際列車運行開始、サハリン画界条約、オデッサの大学教授解職、ヴィッテ入閣の件など）についてである。

ほかにロシアのバルカン政策や極東における自由港について報告している。

この年の九月から十二月ごろにかけて、夏秋（満州社外理事）、末永（大阪商船）、田中（満州理事）、上田（日本大使館）などが、二葉亭をその下宿に見舞っている。が、かれの病（不眠症・神経衰弱・長眠症など）が改まらないので、禁煙を勧告し、上田などはかれのタバコをうばうと、それを捨て、その不可なるを説いた。その忠告が功を奏したのか、十二月末ごろになると、かれはきっぱりとタバコをやめた。その後、体調もよくなりかけた。が、顔色はあまりよくなく、青白かった（柏木）。

十二月二十六日の深夜――午前三時ごろ、ソリにのって雪中を中央電信局にかけつけ、議会における外相の演説を打電した。

大晦日、二葉亭は門番一家の姉妹らとイサアーキ大寺院を訪れ、新年をむかえた。

明治四十二年（一九〇九）――二葉亭は四十六歳。かれは日本大使館における正月の祝賀会に出席した。このとき外語出身者十四、五名が、かれをとりまいてシャンペンの盃をあげ、「二葉亭先生万歳！」をとなえた。

一月四日、ジェという女性と島々をソリでドライブし、夜その家ですごした。

一月十四日（ロシア暦一九〇九・一・一）、柏木は土地不安案につき、警官に何度も道をきいて、やっとのことで二葉亭の下宿にたどりついた。

午後、六時すぎのことである。さいわいかれは家にいた。

――じつはこの間から睡眠が不足していたので、きょうは一日ねて、いま起きたところさ。ぼくのところはいま朝だから、まあゆっくりして行きたまえ。

と、いわれた。

机のうえには、手紙や内外の新聞がうず高くつまれており、またウォッカのびんもあった。また机のそばにはサモワール（ロシア特有の湯わかし器）があった。

二葉亭は、文学のこと、語学の研究のこと、いろいろと話をしたが、しばらくすると、

――ウォッカをいっぱいやりたまえ。

と、いうと、机のうえにあったびんから、小さなグラスにそれを注いだ。

――ぼくは夜ねれないから、すこしづつやっている。

といった。柏木はそれをチビ〳〵のんでいるのを見て、

――そりゃ君、チビ〳〵のんでいては、かえって酔う。こうやって一息（ひといき）にやるのだ。

と、いうや飲み方を実演してみせた。かれこれ夜八時をすぎたので、いとまごいをして帰ろうとすると、

――君いっしょに散歩に行こうじゃないか。

といったので、それじゃおともしましょう、といって、いっしょに下宿を出た。

ぶらぶら市中を歩いていると、四ッ角のところに至った（モルスカヤ街とネフスキー大通りの角地か）。

――ここで『大阪朝日』を売っているよ。一枚十銭（一〇コペイカ）とるが、日本から送ってくるより新しいのがある。露都で日本の新聞を売っているとはおもしろいじゃないか。

というと、道ばたに立っている新聞売りから一枚買った。柏木も一枚もとめた。それは前年（明治41）の十二月二十三日付のものであった。それから、

――何か食おう。

といわれ、通りのレストランに入った（柏木秋江「露都に於ける二葉亭先生」）。

二葉亭の「手帳」二十六（明治42年）に、

柏木（満鉄留学生）と共にM.（エム）Ja（ヤー）で昼食

とある記述は、このときのことをいったものであろう。

「エム　ヤー」とは何のことか。これはおそらくレストラン名である。おそらくMalo-Yaros lávetz（モルスカヤ八番地。「フランス・オテル」のとなりに位置）を指すものと思われる。二人で三ルーブリ二〇コペイカ使っている。

店に入ると、滞露ちゅうの鉄道院（明治41年に帝国鉄道庁、通信省鉄道局を統合して設けられた鉄道行政の中央官庁。大正九年、鉄道省となる）の藤田理事が食事をしているのと会い、帰途いっしょに散歩して別れた。

六日（火）、ジェとその母といっしょに墓地をおとずれた。

八日（木）、ジェの家へいった。

十四日（水）、ジェの家へいった。

十五日（金）プランソンその他を儀礼訪問したのち、日本大使館へいき、夕方マリンスキー劇場の二階ボックス席で「白雪姫」をみた。その代金は二七、八ルーブリ。この日、ロジェーストヴェンスキー（一八四八～一九〇九、ロシア海軍軍人、中将。一九〇五年、対馬沖で日本艦隊と交戦し、大敗し、帰国後裁判にかけられた）が亡くなった（午後4・35分）。そのニュースを『朝日』に打電した。

十六日、岡本満鉄調査役が帰国の途についた。この日、二葉亭は、田中、夏秋その他とともにフロに行った。[13] フロは露都に何ヵ所かあった。

中央浴場……カザトキ・ペレウロック一一番地

ゼリブイエイエフ……バッセイナヤ一四番地

ヴォロニン……モイカ八二番地

河岸浴場……ネバ河岸ドヴォルトゾビ橋のちかく。

注・旧式のフロ。料金は五～一〇ルーブリ。シーツは一〇コペイカ。タオルは五コペイカ。

注・暖かいフロ。料金は一ルーブル。

注・原文はロシア語。

ベディカーの『ロシア』一九一四年より。

門番からパスポートをうけとった。

十七日、鐘(金)ヶ江に四〇ルーブリ貸してやった。

十八日（日）、ジェの家へいった。

十九日、イギリス・ホテルに行き、お茶をのんだ。代金は三〇コペイカ。駅で朝食をとり、一ルーブル一〇コペイカ使っている。が、どこの駅なのか。なぜ、ここで朝食をとったのか。

二十日、辻馬車でダンチェンコ、ロマーノフ、ヴィリアム、ギルス、ゲルガルタ宅などを逐次訪問した。また市警務長事務所（警視庁？）にいき居住許可証の支払いをした。

二十一日、製本屋に行く。海相辞職の件、新公債募集の件を打電した。

二十五日（日）、ジェの家へいった。

二十六日（ロシア暦1・13）、世界漫遊旅行ちゅうの原　敬（たかし）（一八五六～一九二一、明治・大正期の政治家。当時内務大臣）が露都についたので、フィンランド駅に出迎え、その旨日本に打電した。原の欧米巡遊は、観光が目的であり、視察したところは工場などが多かった（『原　敬全伝』日本評論社、大正11・5）。二日後の二十八日、二葉亭は夕方、原のホテルをおとずれ会見した。翌二十九日、原は帰朝の途についた。

三十日（土）、ロシア人の知人らとコムミサルジェルフスカヤ劇場に出かけた。

二月十一日（ロシア暦1・29）紀元節（神武天皇即位の日を祝っての祝日）につき、日本大使館をおとずれた。翌十二日、警察分署にいき、パスポートをそこにおいた。

十五日、十年前に亡くなった陸軍武官・伊東圭一の法要に出席した。夜、市民公会堂（対岸のペテルブルグスカヤ島のアレクサンドロ公園にある〝国民館〟のことか）において、オペラ「ファースト」をみた。

十八日、ロシア大公ウラジーミルが亡くなり、その旨『大阪朝日』に打電した。二十日（土）、カゼをひいたものか、はじめて医師の診察と投薬をうけた。その代金は、約四ルーブリ。イチゴとレモンのシロップ（果汁）をのんでいる。

二十一日（ロシア暦2・8）、寒気のきびしい中、ウラジーミルの葬儀がおこなわれ、二葉亭は長時間にわたってそれを見物したために、カゼをこじらせた。

二十六日、体温計、ミカン、ナシなどを求めた。

二十八日、川上俊彦はドイツへの留学途上にある梶浦海軍軍医をともなって二葉亭の下宿をおとずれ、診察させたところ、かれのやまいは肺炎カタル（肺の組織の炎症）と診断した。

三月四日（木）、福田とともに昼食をとった。

五日、医師クコヴェーロフを訪れ、診察をうけた。肺炎および肺結核（はじめは無症状。症状の進行とともにセキやたんが出たり、呼吸困難になる）との診断をうけた。診察費は五ルーブリ。

かれの病気は、ずっと以前からその兆しがあったようで、一ヶ月ほど自宅療養をやってみたけど、毎日三八、九度の熱があり、それが取れなかった。

八日、夕方、（クコヴェーロフ）医師に宅診してもらった。代金は一〇ルーブリ。十二日、一ヵ月分の家賃四〇ルーブリ支払った。ほかに昼食、朝食代として三〇ルーブリ。女中のオリガに諸経費として二五ルーブリ。ジェーニャ（門番の長女）に三ルーブリあたえた。リヨン銀行にまだ預金が六〇〇ルーブリほどあった。

十三日（土）、この日、病状悪化を理由に、朝日新聞社に特派員を辞める旨打電した。電報は、使いの者（マトヴェー?）に打ってもらった。

十五日、医師クコヴェーロフに宅診してもらった。空っ風のつめたい晩、柏木は友人とともに二葉亭をたずねた。かれはフランネルの一重（裏地のない夜着か）をきて寝ていた。病勢はだいぶ進んでいたころである。

二葉亭は、慢性の肺炎にくわえて、結核に犯されていた。左肺はなんともないが、右肺が悪化しているとのことであった。そのせいか、セキをすると右肺がひびいて痛いことがある。

柏木が、

——いかがですか。

と、たずねると、

――やはり肺病やみのやることをやっている。

と、さみしく笑いながら、脇の下から体温計をとりだしてみた。

――三十九度とすこしばかりある。どうも熱がとれなくてこまる。この熱がとれないと、ぼくは死ぬのだそうだ。それにふだんは何とも思わなかったが、さて病気になってみると、日本（人）の胃の腑には、ビフテキやカツレツの油のつよい奴は、食う気になれない。が、しかし、おなじ死ぬならロシアの土になる方がましだ。

と、わりあい元気に語った。が、神経がかなりまいっているようだった。

柏木は病気にさしさわりがあってはと思って辞去したが、二、三日後、入院したと聞いた。

十八日（ロシア暦2・5）――この日、二葉亭はワシーリィスキー島にあるアレキサンダー病院に入院することになった。早朝より、教え子の清水や中尾が手伝いにきた。これまで世話になった者にチップをあたえた。

女中オリガに　一〇ルーブリ
ジェーニャに　三ルーブリ
マトヴェーに　一〇ルーブリ

午後三時、赤十字のマークのついた箱馬車が迎えに来た。かれと付き添いの者は、それにのると病院へむかった。馬車の代金は一〇ルーブリ。ほかに荷物運搬料（五ルーブリ）、付添ってくれた者に二ルーブリ、病院の付添いに各二ルーブリ支払った。入院費は、一週間二五ルーブリ。

二十日、妻・柳子が送ってくれた家族の写真を、門番の妻がわざわざ病院までとどけてくれた。二葉亭は、国や人種が異なっても、人情はひとつ、とおもい、うれしい気持になった。

二十二日、長谷川静子、柳子にあてて遺言状および善後策をかき、それを坪内雄蔵宛の封筒に入れたが投函されることはなかった。

二十三日、夏秋亀一、田中清次郎、末永一三らが見舞いにやってきた。このとき帰国のルートについての案が出された。主治医は、あなたの熱はいっこうにさがる見込みはない。露都を退去して国に帰るしかない。ここにいても死あるのみである、と帰国をすすめた。

かれの熱はふつう三十八、九度あり、ときに四十度を越すこともあった。帰国するにしても、いかなる経路をとるかが問題であった。シベリア鉄道を利用すれば、二週間ほどで帰国できるが、その間ずっと体はゆすぶられ通しである。下宿から病院に馬車でゆっくり運ばれても、病院に着いたとき、熱がだいぶ高くなっていた。毎日、体をゆすぶられて熱が高まらぬはずはない。

医者は、陸路をとっても命にかかわることはないであろう、と安易に考えた。ところが友人らは、医者の案に反対し、海路によって帰国することを主張した。陸路リトアニア、ドイツ経由でベルギーのアントウェルペンまで行き、そこから船で北海に出、イギリスのハーリッジに至り、それより汽車でロンドンに出、便船をえて帰るのが得策と判断した。

問題は、旅費であった。船旅だと日数がよけいにかかるばかりか、金もかかる。

シベリア経由なら　四五〇円ぐらい。
ロンドンからの海路だと　八〇〇円ぐらい。

海路だと、社がそんな大金を出すはずはないし、また迷惑をかけたくない気持があって、二葉亭はシベリア経由で帰る決心をした。

二十四日、この案には夏秋が反対し、上田仙太郎らと激論になった。旅費は、ふしぎな話だが、一文も出さなくてもよいことになり、友人が引きうけてくれた（満鉄理事・田中清次郎が出したものらしい）。また露都からロンドンまでは、末永一三が付き添うことになった。

この日、萩原大佐が見舞いにおとづれた。

二十五日、『東京朝日』に、ロンドン経由で海路帰国する旨電報をうった。二十六日、ロンドンの末永から電報がとどき、船室がとれたことを知らせてきた。四月三日ごろ、サンクト・ペテルブルグを発つよう希望してきた。

二十八日、ジェーニャとリューバの姉妹、清水らが見舞いにきた。翌二十九日、銀行の預金をすべておろした。三十一日、清水、上田、サーシャ（不詳）が見舞いにきた。

四月三日（ロシア暦3・21）、午後六時、かれは病院をでた。その後、ホテルにおもむき二泊したものか。

一　肺の疾患により海路帰国の途につく

四月五日（ロシア暦3・25）、夕方、二葉亭は、電灯がこうこうと輝くワルシャワ駅（いまは遊歩商店街）に、自動車からおりた。かれは元気そうにしていたが、中尾秀男（外務省留学生）と清水三三が、その体を支えていた。

駅頭には、大使館員、武官、在留邦人、友人、知友らの見送り人が、かれの到着をまっていた。

――佐藤尚武　松島　肇　上田仙太郎　小田切中佐　田中清次郎　柏木秋江　鐘ヶ江正明　落合謙太郎　山口　桜井　鎌田　成瀬　塩田などのほか、満鉄留学生が、一、二名いた。

このときプラットホームまで見送った人びとと、どのような会話がなされたものか想像するしかない。が、かれはひとりひとり、何かことばをかけ、握手したものであろう。

柏木がプラットホームでにぎった二葉亭の手は、〝熱していた〟という。在留邦人に見送られて出発するので、このとき気が張っていたせいか、いたって元気にみえたが、重患であることに変わりなかった。病んで帰国する者を送るものとしては、相手の長途の旅を気づかうと、またたえがたい苦痛をおぼえた。

二葉亭が帰国の途につくとき利用した
ワルシャワ駅（ペテルブルグ）

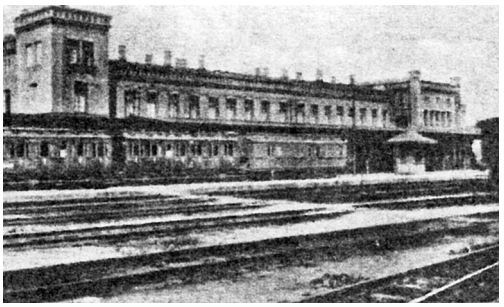
かくして時計が午後十時十五分をさしたとき、汽車はおもむろに動きだした。かれは万国寝台列車の一等車にのっていた。汽車がうごきだしたとき、かれはガラス越しに、見送り人に微笑した。が、これがこの世のみおさめとなった。……

二葉亭と付き添いの末永一三をのせた汽車は、ワルシャーワ駅を発ったのち一路南下し、国境の村アイトキューネンに着くまで、ガトチナ（ペテルブルグの南西四六キロ）――ルガー――プスコフ（ペテルスブルグの南南西二四九キロ）――デュナブルク――コウノなどの駅舎を通過したものと思われる。汽車にのること丸一日。

翌六日の十二時十分ごろ、ヴィルノ Vilno（別称 Wilno, Wilna（ビルノ　ビルナ）。モスクワの西南西八七〇キロ、リトアニアの首都）についた。汽車はそれより右に折れ、六時間ほど走ったのち、アイトキューネン Eydtkühnen（人口五五〇〇ほどのロシアとドイツの国境の村）についた。時計の針は、午後六

時二十分をさしていた。

この村で荷物とパスポート検査をうけたのち、ドイツの汽車にのりかえた。汽車は、十五分後、出発した。



ドイツとロシアの国境の駅“アイトキューネン”（ヴィルバレンともいう）。

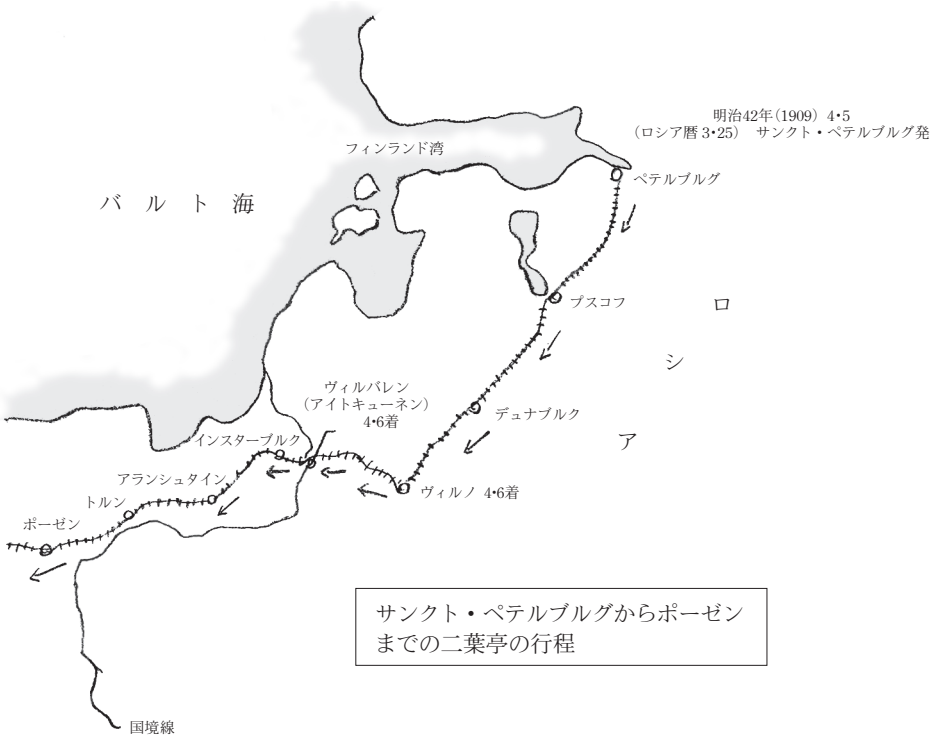
その後、汽車は、いかなるルートをとったものか。おそらくつぎのような道順であったであろう。インスターブルク（現・チェリヤビンスク）――ゲルダウエン――コルシエン――アランシュタイン（現・オルシケン――ポーランド北東部・ワルシャワの北二二〇キロ）――トルン（ポーランド北部、ワルシャワの北西二一二キロ）――イノブロッラフ（ポーランド中北部）――ポーゼン（現・ポズナニ――ポーランド中西部、ワルシャワの西三〇三キロ）――フランクフルト・アン・デア・オーデルをへて、七日の午前六時すぎ、ベルリンについた。停車場については何も語っていないが、フリードリヒ　シュトラーセ駅か。かれは到着後、日本大使館の上村、『東亜』の主筆・老川、西村医師らに出迎えられ、手厚い介抱をうけるのだが、二葉亭によると、たしか停車場ちかくの Metropole で休息したという。

Metropole というのは、駅の西側にある「メトロポーレ・パラスト」Metropole Palast（〝首都の館〟の意）というホテルのことであろう。

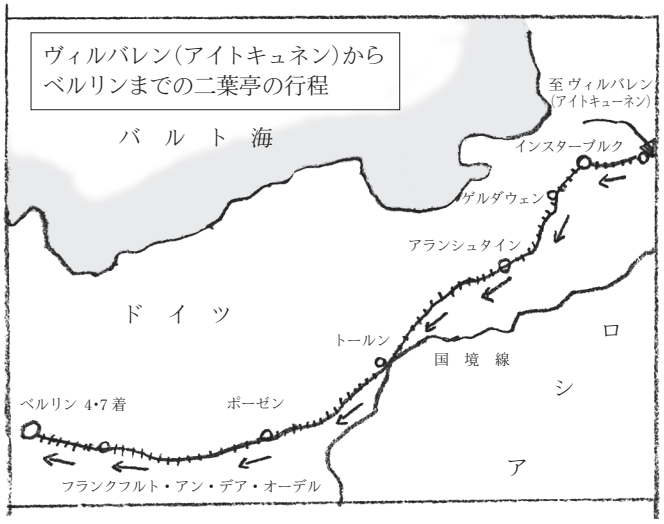
二葉亭は、このホテルで二時間ほど休息をとり、その間に医師の診療をうけた。やがてまた車中の人となって、午前八時ごろ、ベルリンを出発した。

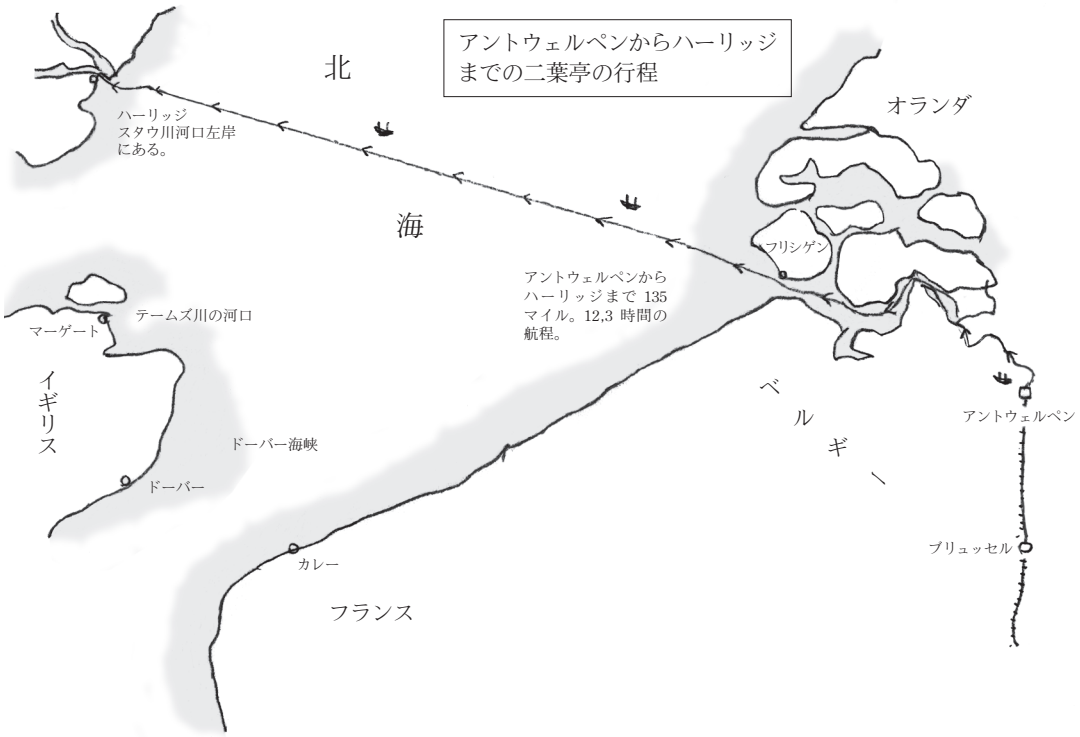
午後六時すぎ、ケルン Köln（ドイツ中西部、ライン川沿岸にある国境の町）につき、ここでアントウェルペン Antwerpen（ブリュッセルの北四七キロ、スケルデ川の沿岸の町）にむかう汽車にのりかえた。が、途中であやまってリエージュ Liège（ベルギー東部、ブリュッセル東南東九〇キロに位置）下車してしまった。やむなくつぎの汽車でブリュッセルに行き、そこでまたのりかえて、アントウェルペンにむかった。

八日、アントウェルペンの中央駅――ミデン・スタシ Midden-Statie に着き〝鉄道ホテル〟（Hôtel Terminus のことか）で休んだが、「起つ能はず」ほど、疲労こんぱいしていた。午後になり、気力が回復し、午後七時、スケルデ川の埠頭よりハーリッジ Harwich 通いの汽船にのった。



サンクト・ペテルブルグからポーゼンまでの二葉亭の行程





ハーリッジはイングランド南東部――ロンドンの北東一一四キロに位置する港町である。

北海の荒海を航行すること十時間以上、九日の午前五時、船はついにハーリッジのパークストン波止場に着いた。この港町はスタウロ川の右岸に位置し、港に近づくと、海に突き出た埠頭や大きな砂浜が目にとび込んでくる。ロンドンまで一一四キロである。それよりグレート・イースタン鉄道の汽車にのり、ロンドンにむかった。同鉄道の終着駅「リバプール・ストリート駅」についたのは何時のことか。〝鉄道ホテル〟(Great Eastern のことか)の一室で休けいするのみで、ロンドン見物の機会を逸した。本人いわく、「市中の光景はトント分(わか)らず」ということであった(「手帳」26)。

それより末永や石井徹らに送られ汽車にのると、汽船停泊所(テームズ川の下流にある「アルバート・ドック」)にいたり、停泊中の日本郵船の賀茂丸(貨客船、船長F・L・サンマー、八五〇〇トン、速力一五ノット)に乗船した。

この日は、ロンドン特有の霧が立ちこめていた。船にのるとき、一般乗客はふつうタラップ(はしご)を昇ってゆくのだが、かれは白い毛布につつまれ、籐(とう)(ヤシ科のつる性植物。茎は弾力があり細工物につかう)の寝椅子にのせられて大事にはこばれた。五、六人の外国人乗組員は、かれのからだを一等の二八号室(左舷の船尾にちかい)に入れた。

ふつう重態の病人は船にのせないが、かれは社の重役からの命があったので大切にあつかわれた。

賀茂丸に乗船してからのことか、ひさしぶりのみそ汁とウナギどんぶりを味わい、大いによろこんだ。

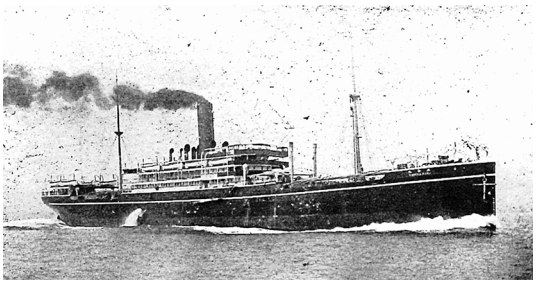
二葉亭の世話をしたのは、吉原清人（一等ボーイ、二七歳）であった。乗船後、はじめて船医・村山玄沢（三七、八歳）の診察をうけているが、その所見はつぎのようなものであった。

体温は三十九度。体はやつれ、皮膚は白く、右の肺の上葉（部）と中葉ぜんぶと左上部に濁音があった。食欲、意識ともに良好。薬としては、持参の

クレオソート（木タールを蒸留して得た医薬）

コデイン

などを、一日三回服用していた。病名は、肺結核症。四月十日（土曜日、ロシア暦3・28）、船に損所箇所があり、出帆がおくれ、午後五時四十分ごろ、ようやく動きだした。ロンドン出帆に先だち、二葉亭は妻宛に葉書をだしているが、その文面には「お前達にも直き遇へる　併し途中が疑問だ。言ひたい事は沢山あるが書けない」とあった（長谷川柳子「主人（二葉亭）の平生に就て私の悲しき思ひ出」）。



二葉亭がのった日本郵船の「賀茂丸」

十一日、快晴。海上はおだやか、夜稲妻がひかるのをみた。十二日、この日の午前十一時ごろ、船長・事務長・コック長・船医らが各室を見舞った。十三日、体温がすこし下った。この日、スペイン沿岸を航行した。十四日、晩にボーイがやって来て、ジブラルタル（スペインの南端の港町、イギリスの直轄植民地）にさしかかったといったけど、気分がすぐれず、起きてみる気力はなかった。

十七日、午前五時すぎ、マルセイユ（フランス地中海岸の港町）についた。このとき妻・柳子に宛てて絵葉書をだした。「今朝マルセーユ着、病状に異りたる事なし」。これが二葉亭の絶筆となった。各室はしずかであったが、外はうるさかった。午後七時ごろ、同港を出帆。

ロンドンを出帆以来、この日までの八日間、二葉亭の体温は三十九度ほどもあった。

食事は、本人の希望にそったものが出され、かゆ・鶏肉・ビフテキ・牛乳・玉子などを食した。が、食欲が

おとろえたのは、マルセイユを出帆し二日目あたりからである。

二十二日、船はポートサイド（スエズ運河の北端に位置する港町）についた。この日の体温は四〇度ちかくあった。二十三日、スエズ（エジプト北東部の港）についた。

暑さがますにつれて、二葉亭の容態はますます悪くなっていった。薬はいっさい飲まなくなり、船医を遠ざけた。外気はあついばかりか、じぶんの体温も高いので、裸になってねるようになった。船長はそんなかれの姿をみてあきれていた。

二十五日、気温八十四度。体温三十九度七分。この日診察したら、両肺背部に下垂うつ血がみとめられた。二十八日、紅海口（アフリカとアラビア半島にはさまれた細長い海の出入り口）を通過し、外洋にでた。

五月一日、ますます病状は悪化し、食欲も意識も減退してきた。七日、くすりも食物もうけつけなくなった。九日、意識がこんだくし、ときどきうわごとをいった。

五月十日――昏睡（こんすい）状態となり、午後五時十五分息を引きとった（ベンガル湾上――北緯六度二分、東経九二度三四分）。

亡くなると、大工がりっぱな寝棺をつくり、遺体を船室に安置し、通夜をやり、船客の礼拝もおこなわれた。

十三日、賀茂丸はシンガポールに入港した。同日の夕刻、二葉亭の遺体は、埠頭より二頭馬車にのせられると、三マイルほど離れたバシルバンジャンの丘にはこばれ、そこで荼毘にふされた。

賀茂丸は、二十九日に神戸に着き、妻・柳子らが遺骨を出迎え、海岸通りの西村旅館で焼香した。三十日、遺骨は新橋駅に到着、文学者百数十名の出迎えをうけたのち、本郷区弥生町三番地の自宅に入った。六月二日、神式による告別式ののち染井墓地に埋葬された。

二葉亭は、じぶんが死ねば、『朝日新聞』から多少の涙金（わずかの金）が出る、と予想していたが、じっさいは朝日新聞社から遺族にたいして、応分の交付があった。

勤続慰労金　二五〇円
同　割増金　一〇〇円

弔慰料　三〇〇円
特別弔慰料　一〇〇〇円
計一六五〇円

この弔慰金は、きっと遺族にとって望外の額であり、生活上大いに助ったことであろう。かれは社から涙金が出たばあい、年齢にかかわらず、家族六人で均等分するようにいっている（「遺言状」明治42・3・22付）。

長谷川家には遺産といえるものは一つもなかったからである。遺族は、年老いた母――未亡人――小さな子供が四人である。朝日の主筆・池辺三山は、見るにみかねて、「遺族もまた遺産なり」と、ため息をもらすほどであった。二葉亭は生涯、金の福にめぐまれなかったが、金にはひじょうに恬泊（欲がすくなく、あっさりしている）であった。人にはよくチップをはずんでおり、ふとっぱらな人であったようだ。

二葉亭は、じぶんの死後、家族が生活苦におちいることを予測し、先妻の子供ら（玄太郎、せつ）には、学校をやめ奉公に出るようにといい、母には実家にあたる家のやっかいになるよう勧め、妻には二児をつれて実家に帰り、時機をみて再婚するよう指示をあたえた（「善後策」）。が、さいわい遺族は友人たちの尽力によって、最悪の運命をたどらずにすんだ。

人があつまって生活を営む社会は、表の顔とうらの顔があるのがふつうである。帝政末期にかぎらず、ロシア社会は、どんな時代にも醜悪な部分があり、風俗は乱れていた。君主による独裁専制政治がながくつづき、無知なる大多数の国民は、権力者の暴威にならされていたから、しぜん卑屈におちいり、けがれのない快楽が世にあることを考えず、酒色に耽った。人間のかなしき性（ならい）である。

二葉亭は、人間をどのように観ていたのか。かれの見るところ、人間とは獣的な欲望をもった動物であり、やることといえば、食うこと、飲むこと、女とたわむれることだけである。かれは子どもの時分から女性の魅力にまどわされ、近所の女のしりを追い回した。中年になって、まじめな人間になったけど、ふたたび女に手を出したという（「予の半生の懺悔」）。

さかんに読みふけったロシア小説の影響もあって、下層社会に興味をもち――世の堕落者、背徳者、貧しい人間の罪悪をあわれむ気持がつよまった。英語ができる良家のお嬢さんは、人形とおなじで何の役にも立たぬ、といった。かれが下層社会の人間を好んだのは、かれらに天真（いつ

わりや飾りけのなさ）が、みとめられたからである。

惹かれた女は、ふしぎにも――

日陰者……あばずれの下等な女。日のさゝない、暗くつめたい所で、必死に生きている女。元気でほがらかであり、大きな口をあけて、「アハゝゝ」と笑うような女。

きたない服装をした貧しい娘……不幸な境遇にあるが、生気があり、陽気である。じぶんのなりを恥とせず、平気な顔をしている女。

二葉亭の見方では、人間の純真さは、化粧し、美服をまとった上流階級に属する女性にあらわれず、かえって、ボロやそまつな衣服を着た人間に、まことの人間らしさをみることができるというものであった。かれが下層の女性を好んだのは、かれらが他人を意識して、うわべを飾ったり、みえを張ったりするところなく、ありのまゝに生きているところであった。

露都における暮らしが半年になると、生活にもなれ、街のようすもわかりかけてきた。気持にも余裕ができ、色恋にも興味をもったと想像される。たそがれ、公園の木蔭や池のそばで男女が相かたり、抱きあっているさまを目にしたり、怪しい女がぶらぶら歩いているのを見ると、つい愛欲を感じることもあったであろう。

露都第一の目抜き通りは、むかしもいまもネフスキー大通りである。が、昼間といわず夕方も、ひとの通りがたえない所である。通行人にまじって、「例の名物女もさかんに徘徊していた」のが、大正三年（一九一四）ごろの話である（大庭柯公「欧州大戦当時の露都」）。

一　淫落の町　ペテルブルグ

露都の淫蕩の歴史はふるい。

モスクワ大公のある貴婦人は、馬車にのり街中を走っていたとき、たまたま美男子をみいだし、従者に命じてその者を宮殿に招き入れた。一週間以上もその若者に夜とぎの相手をさせ、淫欲がつきたとき解放した。

二葉亭が露都にいた明治四十一、二年（一九〇八、九年）からさかのぼること約一二〇年――一七九一年（寛政三年）当時、この街に漂流民・大黒屋光太夫（一七五一～一八二八、伊勢若松村の船頭）が滞在し、エカテリーナ二世（一七二六～九六、ロシアの女帝。夫を廃して帝位についた）に帰国を請願していた。光太夫は、サンクト・ペテルブルグにいる間に娼館を見学し、遊女と歓をつくした。

一七九一年（寛政3）七月ごろ、光太夫は、トルッチニーノフ大臣夫妻と娘、同夫妻の友人らと納涼の宴に招待され、郊外に出かけた。帰りみち、馬車をおり、みなネバ川の橋（じっさい船をうかべたもの）のあたりまで歩いた。そのとき光太夫は、遊女屋に行ったことがあるか、と尋ねられた。

「まだ行ってみたことはありません」と答える、と、トルッチニーノフの妻は、夫に何やらささやいた。彼女は光太夫を夫といっしょの馬車にのせると、とある館にむかった。それは四十間（約八〇メートル）四方ほどの六階建ての建物であり、広い中庭がある、りっぱなものであった。案内の者が、一同をまず四階の客間に通し、しばらくすると三階へ案内した。

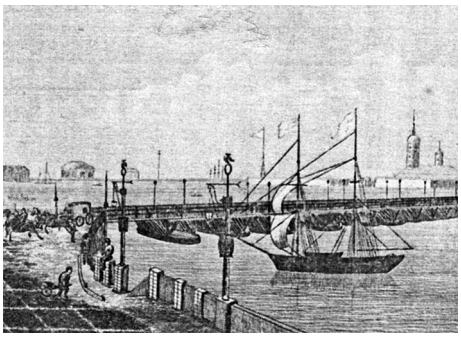
その部屋の床は、大理石が敷いてあり、まん中にテーブルをおき、椅子がめぐらしてあった。窓の下に横に椅子がならべてあり、窓には香りのよい草花の鉢が置いてあった。一同が椅子にすわると、酒や肴や菓子など出てきた。

給仕の少女もあでやかであったが、しばらくすると、若い娘たちが、花を飾ってあらわれた。彼女らは一同にむかっておじぎをした。おじぎがすむと、娘たちは窓の下にならべてある椅子にすわった。どの娘もはなやかで美しかった。光太夫は、トルッチニーノフの妻ソフィヤ・イワーノヴナ（もと女王の侍女）に、「ここはどなたさまの館ですか」、と聞いても答はないし、侍女にたずねても笑って答えなかった。

そのうちに酒宴となり、歌やおどりがはじまった。光太夫はふたたびソフィアにむかって、ここはどなたの館かときくと、じつはここは遊郭である、と教えられた。やがてかれは給仕の娘に案内されて、最高級の遊女の部屋をみせてもらった。このクラスの遊女になると、三部屋使っていた。

第一の部屋……鏡、油絵、机、草花の鉢（はち）などがある。

第二の部屋……ビリヤード、碁盤、書棚、楽器などが置いてある。



ペテルブルグのネバ川に架かる“船橋”

第三の部屋……部屋のなかに厚手の幕がたれたベッドがある。タンスが二つあり、その上にランプが二つ置いてある。ベッドのそばに深紅色のロープが一本張ってある。それは脱いだ衣服をかけておくためのものである。

遊女屋が入っている建物は、一階を酒屋に貸し、二階はふつうの住居。三階と四階が女の館となっていた。

この日は酒宴だけにとどめ、日が沈むころ、みないっしょに帰った。

その後、光太夫は王宮からの帰り道、遊女屋のまえを通ると、給仕の娘たちの目にとまり、ぜひ寄っていけと建物の中に誘い入れられた。さかんに酒やごちそうをすすめられ、今夜はここに泊っていけといわれた。さて相方をきめる段になると、珍しい客ということで、だれもが自分が相手をしたいといい、なかなかきまらなかった。

エリザベータという遊女がくじに当ったが、はずれた四人の遊女と一晩中、語りあかすはめに陥り、日本の遊里の情景について語った。翌朝、帰るとき、エリザベータから絹のマフラー一枚、絵を三枚、銀貨三枚を贈られた。固く辞退したけれど、聞き入れてくれないので、しかたなくもらった。

その後またおなじところを通ったので、このあいだの礼をのべようと思って立ち寄ったら、こんどは遊女屋の主人夫婦から歓待された。光太夫はいずれ帰国することがわかっていたから、餞別として銀十五枚をおくった。

光太夫がたびたび寄った娼家（しょうか）は、王宮の西、道路を一つへだてたところにあった。かれによると、遊女屋は露都に三ヵ所、対岸のワシーリィスキー島に三ヵ所あったという（『北槎聞略』巻之七）。

公娼だから、役人でも平民でも行くことができた。大きな娼館になると、遊女は二十五名から三、四十名もいたという。その外、ところどころに私娼窟（役所の許可をえないで売春をおこなうところ）があるが、ことのほか取り締まりがきびしく、もしみつかると、娼婦はもちろんのこと、客まで罰せられた。

売春は、貧困者とおなじく文明の所産といわれている。売春は文明社会と同一のひろがりをもっている。ユダヤ人は、売春を重大な悪徳とかんがえたが、それが小アジアにおいて邪悪な宗教によって培養され、文明が西のギリシャやローマに移動したとき、影のようについていった。社会

や経済の変化は、売春の撲滅に影響する。売春は社会において欠くことのできぬ要素ゆえに根絶できぬ、と考えられている。

ひとは道徳心が弱まると、じぶんの性癖にしたがうようになり、快楽が人生の主目的になる。売春は普遍的なものであり、どんな国もこの害悪から逃れることはできぬという。[14]

いつのころか不明だが、ロシアの都市には、首都のサンクト・ペテルブルグをはじめ、いたるところに愛人紹介所のようなものがあり、だれでも五〇ルーブリの入会金を払い、会員になると、どんな女性とも自由に面会できたという。やがてそれが全国にひろがり、淫蕩の源泉になったという（『露西亜論』黒龍会本部、明治34・11、一〇四頁）。

また十八世紀のエカテリーナ二世（一七二六～九六、女帝）の時代、モスクワに〝肉体クラブ〟なるものがあった。上流階級の男女八名がはじめたもので、会員はすべて貴族であった。それはいまでいう一種の乱交クラブであり、あらゆるらんちき騒ぎがおこなわれた。その退廃ぶりの社会におよぼす影響は大きかったので、エカテリーナ二世はそのクラブを閉鎖した。彼女はそこにじぶんの淫猥さ――みだらな姿をみたからである。[15]

旅行者によれば、ロシアのどんな町や村にいっても娼婦がいたという。農村の娘は、金のために身を売ったし、結婚するときは売春をやめた。

ロシア人の三つの悪徳とは、残忍性・アルコール中毒・性的不道徳であり、露都における風紀の乱れは、最低であった。[16]きりょうの点からいえば、ロシア女に美人はすくなく、[17]フィンランド、リボニア、エストニア、ドイツの各女性の美貌にかなわなかった。とくにドイツ娘は、美人としての評判は高かった。[18]

十八世紀初頭の帝政期、この国では売春は良浴に反するものとみられた。一七一六年ロシア皇帝ピョートル一世（一六七二～一七二九）は、娼婦が連隊にちかずくことを禁じる布告にくわえ、警察に怪しい家（酒場、とばく場、遊女屋）を一掃するよう命じた。一七六二年、堕落した女を収容していた施設が、カリンキン病院と名を変えた。兵士に性病をうつした女性患者らがそこに入れられていたのだが、治療がすむと、彼女らはシベリヤの鉱山に送られた。

エカテリーナ二世は、梅毒をおそれ、その子のパウロ一世は、一八〇〇年にアル中の女、わいせつ行為をする女、ふしだらな女を、シベリアに追放し、強制労働させる旨の布告をだした。が、こうした抑止策は、効を奏しなかった。ロシアにおける売春は、ずっと非合法であったが、一八四〇年代になると、内務省は寛容をもって臨むようになった。売春は、社会にとって必要かつさけることのできぬ悪習であり、それを突然に禁じることはできぬことを知ったからである。

一八四四年（弘化元）、サンクト・ペテルブルグにおいて、

私娼は……週一回

売春宿の遊女は……週二回

検梅をうけることを義務づけられた。また娼婦のパスポートとして「黄色（ジョールトゥイ・ビリエート）の札」（営業許可証）を携帯せねばならなかった。

山内作左衛門

売春婦として登録された女は、つねにこの札を身につける必要があった。もぐり（無免許）の娼婦のばあい、官憲に逮捕された。「黄色い札」には、氏名・年齢・健康状態・住所などがしるしてあり、医師のスタンプが押してあった。[19]

光太夫の入京から約七十年後の一八六二年（慶応二）春――幕府のロシア留学生六名は、[20]元外交官のゴシケヴィッチの世話により、露都のワシーリィスキー島の借家でくらし、出張教師から授業をうけていた。学生取締格の山内作左衛門が、故国日本に送ったてがみには、いろいろおもしろい報告がなされている。

サンクト・ペテルブルクの娼婦は、たいがい夜十二時をすぎたころ、市街や庭園などをうろうろし、客をひろっていたという。家（部屋）をかりて、ひろった客を連れ込む手合いもいた。夏の夜はさておき、厳冬、客をえることなく、積雪のうえを夜おそくまで彷徨している姿をみると、何とはなしにいたましくおもわれた。

こういった辻君は、〝印（しるし）の札（ふだ）〟（「黄色の札」鑑札）をもち、それを下着のあいだ、靴のあいだに入れていた。当時の場代は――

上等な女……一晩二五ルーブリ

中位の女……一五、六ルーブリ

下位の女……一ルーブル

上玉の美人とたのしむときは、酒食費を別にしても、場代のほかに銀十銭（一〇コペイカ）ほどチップをあたえねばならなかった。

明治の末か大正時代のことか、ニコラエフスク駅（現・モスクワ駅）から南西にすこし入った鍛冶屋横町（クヅネチヤイベレウーロウ）や釣り鐘横町（コロコーリナヤ）には、〝会見の家（ドームスウィダーニヤ）〟（待合）があったという。そこにはふつうの家となんら変らないが、制服を着た玄関番が立っていて、顔なじみが女性をともなって来たとき、奥に通した。いちげんの客は中に入れなかった。

ネフスキー大通りの北側の人道は、夜九時をすぎてから街娼がうろうろし、隊商横町（キャラヴァンナヤ）十番地のホテルは、部屋が八、九〇もある大きなラブホテルであり、夜十一時ごろになると来客で満員の状態であった。ペテルブルグにはこの種の連れ込みホテルが、二百軒ほどもあったようだ（『柯公全集第三巻』大正14・5）。

一　謎の女性〝ジェ〟

二葉亭が用いていたオットー・キルネル社製の『日記（ターゲブーフ）』Tagebuch（一九〇九年＝明治42年製）に、六回ほどЖ（ジェ）という女性のことが出てくる。原文はロシア語で書かれている。その邦訳をひろうと、つぎのようになる。

明治四十二年（一九〇九）

1・4（日曜日）――ロシア暦1・17。

ジェとともに島めぐり。二ルーブリ。夜を彼女のもとですごす。

注・ネバ川の三角州（デルタ）には、大小四十以上もの島がある。ペテルブルグの自慢の種であり、そこに金持の別荘があった（Ruth Kedzie Wood 著 The Tourist's Russia, Andrew Melrose, London, 1912, p.97）。

1・6（火曜日）

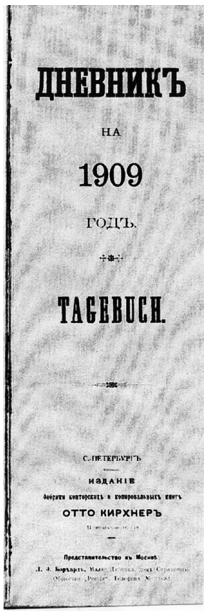
ジェとその母とともにプレオブラジェンスキー墓地へいく。車代、一ルーブル。車代、五〇コペイカ。

1・8（木曜日）
ジェの宅にいく。一三ルーブリ。一四ルーブリ一〇コペイカ（注・これは揚代・チップ・車代をふくめた額であろう）

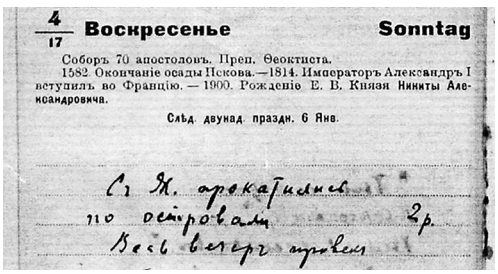
1・14（水曜日）
ジェの宅へ。一三ルーブリ。一四ルーブリ、七〇コペイカ。

1・18（日曜日）
ジェの宅へ。一七ルーブリ、五〇コペイカ。

1・25（日曜日）
ジェの宅へ。二四ルーブリ。二六ルーブリ、四〇コペイカ。



二葉亭が用いたオットー・キルネル社製の『日記』。［早大中央図書館　貴重書］。



二葉亭の『手帳26』に出てくる女性“ジェ”。「ジェと島めぐり。２リーブリ。夜を彼女のもとですごす」（明治42年（1909）１月４日）。

謎の女性「ジェ」のことが出てくるのは、これだけである。

この女性については、中村光夫が『二葉亭四迷伝』（大日本雄弁会講談社、昭和33・12）の三五七～三五八頁にかけてふれ、さらに安井亮平が「ペテルブルグの二葉亭――下宿のこと、ジェのこと、ホテルのこと、その他」（『共同研究　ロシアと日本　第2集』所収、平成2・3）の一二五～一二九頁にかけて言及し、また十川信介が「ペテルブルクの二葉亭」（『図書　11』所収、岩波書店、平成13・11）のなかで、ちょっとふれている。

二葉亭は、明治四十二年の新年をむかえても、昼と夜をひっくり返したような生活をつづけ、不眠症や長眠病から完然に回復していなかった。このころ顔色がよくなく、じぶんで思っているほど健康ではなかったようだ。しかし、このころ「ジェ」を知るのである。そのなれそめについては何も記していないが、おそらく街中か公園で知りあったものであろう。

かれはこの女性のことをЖ（ジェ）とだけしるしている。Жという文字はいろいろ解釈できる。単なる〝女〟のことを指しているなら、женщина（ジェーンシィナ）（〝女〟、〝女性〟の意）のЖをとったもの。また人名の頭文字の意なら、考えられるのは、――

ジャーンナ
ジョゼフィーナ
ジャクリーナ
フランス人ぽい名前

という。ほかにかれの日記や手帳（24、25、28）に三度出てくる女性名として、無視できないのは、

エヴゲーニャ・エゴーロヴナ・ボグダーノワ

注・住所は中ボジャーチェスカヤ街一一号館の一八。「手帳25」。

である。かれがねんごろになった女性の名は、このエヴゲーニャの愛称――ジェーニャではないかという。

一頭びき馬車と客

つまりジェーニャの頭文字が〝ジェ〟なのである（安井亮平）。

中村光夫は「ジェ」のことを「金のかかる玄人（くろうと）（娼妓）」、安井は、「特別な関係があった女性」としている。

当時の娼婦は、つぎの三つにわけられそうである。

邸宅の囲われ者……高級娼婦
部屋を借りて客をひっぱり込む女……中級娼婦
戸外で客をひろう女……下級娼婦

二葉亭とジェの想像図

二葉亭がなじんだ「ジェ」は、母といっしょに部屋を借りてくらす中級の街娼であったようである。

それにしてもかれは、新年（一九〇九年）を迎えて早々に、月に六回もこの女性と会い、そのうちの五回は同衾している。かれの下宿代は月四〇ルーブリ。朝食と昼食に三〇ルーブリほどかかった。この女性と会うたびに、ふつう十数ルーブリ使っている。が、一月二十五日（ロシア暦七日）だけは、どうゆうわけかふだんより一〇ルーブリほど多い、二四ルーブリ使っている。このことをどう解すべきか。

この日以降、かれは「ジェ」と会っていないから、これが〝きぬぎぬの別れ〟（共寝した男女の離別）になったようだ。彼女と別れるにさいして贈った金が、この中にふくまれているように思える。

それにしても二葉亭は、それまでこの女性のために、一ヵ月の生活費（七〇ルーブリ）にもひとしい大金を使ったことがわかる。かれはいっときこの女性におぼれ、夢中になったようだが、〝ぬれぬ先こそ露をもいとえ〟（いったん身をあやまると、またあやまちを平気で犯す意）のことばを想いだし、深みにはまることをおそれ、翻然と悔いあらためたものであろう。

ともあれこの女性は、馬車にのっても往復で五〇コペイカ、二葉亭の下宿からそんなに離れていない所の住人であったようだ（安井亮平）。

むすび

二葉亭は、神戸を出発するとき、友人に、「じぶんの生涯がいまや行き詰らんとしている際に、朝日新聞がこの任務を荷わせてくれたことは、まったくじぶんを救うてくれたわけで、生命を打ち込んで仕事をするつもりだ」[21]と語ったという。かれは朝日に入社するまえから、ロシアの近情、シベリアの実体、ロシアの満州経営などについて、ゆたかな知識をもっていた。が、入社のとき出された条件は、ロシアの実情や戦中戦後の東亜（中国、朝鮮、日本などの総称）問題について研究したものを書いてもらえればよい[22]、というものであった。

しかし、かれが書くものは、執筆に時間がかかりすぎたし、精密すぎて、新聞記事として読者うけしないものであった。このため本人もそのことを気にし、一時は退社を考えたらしい。やがて露都特派員としてロシアにおもむくことになり、日露戦争後のロシアの国情をじっさい観察し、それについての報告を『朝日』に伝えることになった。

ところがかれは病により、抱負をみたすことができず、帰国の途中、インド洋上でなくなった。かれはロシアにおいて何をなしたかったのか。ロシアにおもむくことが決定した――明治四十一年四、五月ごろ、送別会に出席するさいに大庭柯公（一八七二～?、明治・大正期のジャーナリスト。二葉亭の友人。のちロシアで行方不明となる）と会ったとき、――

――じぶんの少しは知られている文学上の位置を利用して、ロシアの政治家に、ひろくふかく交際をもとめるつもりだ。ロシア行は、他日日露のあいだに、ドウカあった場合、役にたつ基礎をすえに行くんだョ。君もそのうちに早くやって来たまえ。

という意味のことをいったという（大庭柯公「対露西亜の『長谷川君』」）。

二葉亭は、平生、ロシアの新聞や雑誌をよみ、その論調を通じて、日本にたいする怨念がふかいことを知っていた。かれは出発前の送別会の席上、つぎのようなことを語り、抱負の一端をしめした。ロシアが日露戦争において、野蛮国日本にまけたのは不名誉であるばかりか、世界の文明の前途にとってもゆゆしき大事である。かの国では時がきたら、もういちど日本と戦争しようといった意気込みがじゅうぶん見られる。

わが国はふたたび戦争するだけの力はない。こんどロシアに行くのを幸いとし、はなはだ不完全な、いささか経験のあるロシア語を使って、日露相互間の誤解をとき、ふたたび不祥の（好ましくない）戦争がおこらぬよう微力をつくす考えである（魯庵生「二葉亭の一生　回顧二十年」）。

二葉亭は、単なる文学者というより、維新の志士肌といった思想傾向がつよく、憂国の士であった。将来日本にとって深憂大患（大きな心配ごと）となるのはロシアであり、満州問題が日露の接衝点と考えていた。日露両民族の前途をうれい、意志疎通の仲介者になりたいと思った。かれは当時、日本屈指のロシア文学者兼小説家と評されていたが、その本領は政論家であった。ロシアの国情研究をまっとうすることなく、高熱をお

して帰国の途についた。ロンドンからは海客（海上の旅人）となり、海の空気にやまいを養っていたが、病状は好転せず、不帰の客となった。享年、四十六歳であった。

二葉亭が出国し、ロシアへわたり、帰途にあがる明治四十一、二年（一九〇八、九年）ごろの日露の世情はどうであったのか、それについて略述しておこう。

明治四十年（一九〇七）七月、日露協約が締結され、朝鮮・満蒙における特殊権益（相互の領土権の尊重、機会均等）をみとめあった。このころ韓国皇帝の密使が、ハーグで開催された第二回国際平和会議において、日本の侵略と独立を訴え、大きな問題となった。が、会議はこれを取りあげなかった。韓国統監の伊藤博文は、皇帝を退位させ、内政を強化した（「ハーグ密使事件」）。

足尾鉱山、別子銅山で暴動がおこり、軍隊が出動して鎮圧した。日刊『平民新聞』が刊行された。夏目漱石が帝大講師をやめ、『朝日新聞』に専属作家として入社した。

明治四十一年（一九〇八）二月、アメリカで排日運動がおこり、日本人排斥案が米国議会に提出された。六月、社会主義者・山口孤剣の出獄歓迎会をひらいた折、〝無政府共産〟の赤旗を押したてために警官隊と衝突し、大杉栄・堺利彦ら十三名が逮捕された。西園寺内閣の社会主義者対策の手ぬるさを非難され、やがて桂内閣にかわると、弾圧をいっそう強化した（「赤旗事件」または「錦旗館」事件ともいう）。

日露戦争後、労働争議や小作争議が頻発するため、第二次桂内閣を組織した桂太郎（一八四七～一九一三、明治期の政治家、陸軍軍人）は、労働運動にたいする強圧政策をすすめ、天皇の権威をかりて〝戊申詔書〟（綱紀の粛正をといたもの）を渙発（発布）し、儀式のとき、それをうやうやしく読みあげさせた。これは教育勅語につぐ、重要な詔書であった。

十一月、高平＝ルート協定が交換され、太平洋方面における現状維持、清国の独立と領土保全、商業上の機会均等主義を確認した。

恐慌が激化し、倒産が相ついだ。永井荷風の『あめりか物語』の刊行。国木田独歩（38歳）、榎本武揚（73歳）らが亡くなった。

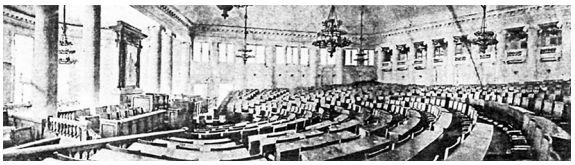
明治四十二年（一九〇九）四月、日糖疑獄事件（砂糖消費税引きあげにからむ贈収賄事件）がおこった。新聞紙条例が廃止され、新聞紙法が公布された（五月）。五月、二葉亭（46歳）がインド洋を航行中、客死した。六月、伊藤は韓国統監を辞任し、枢密院議長となった。十月、伊藤（69歳）はロシアの大蔵大臣ココフツェフと会談するためハルピンに着いたとき、韓国人の民族独立運動家・安重根によって暗殺された。

翌明治四十三年（一九一〇）八月、桂内閣は韓国併合を断行した。韓国を朝鮮と改称し、日本領土とした。朝鮮総督府をおき、昭和二十年（一九四五）まで統治した。

一方、二葉亭が滞在したロシアの世相に目をむけると、かれが露都にやって来たときは、第一次革命（一九〇五年）後の首相ストルイピン（一八六二〜一九一一、ロシアの政治家、名門貴族、大地主の子。のちキエフで暗殺）の時代であった。かれは革命の混乱期に内相となり（一九〇五）、ついで首相となった（一九〇六年）。

殺戮者
ピョートル・ストルイピン

ロシアではここ四、五年、市民・農民・兵士らによる革命運動、蜂起、ストライキなどがひんぱんに勃発し、そのつどツァー政府は弾圧をもってのぞんだ。一九〇六年から一九〇九年まで（明治39〜同42）の間、〝革命家撲滅法〟によって、二千名以上がしばり首となり、二万五千名が徒役と流刑に処せられた。その他、拷問や餓死した者は数かぎりなかった。



国会がひらかれたダウリーダ宮

ニコライ二世は、一九〇六年に国会を召集した（第一回）。第二回の国会は、多くの農民と労働者の代表六十五名が議員にえらばれたが、ツァーとその大臣たちのいうことを聴かぬため、解散させられた。一九〇七年の秋――第三回の国会がダヴリーダ宮殿において召集されたとき、代議員の席はほとんど、地主・商人・工場主・僧侶・将軍・ツァー政府の高官らでうめられ、わずかの議席には、農村や労働者、被圧迫諸国民の代表がすわっていた（ア・ヴェ・シュスタコフ著 荒川実蔵訳『ソ連史』第三書房、昭和22・4）。

ロシアの国会は、皇帝を頂点とする高級官僚らが統治する機関にすぎなかった。革命の推進力は、労働者階級である。が、その指導者は、海外や国内において、ビラ、小冊子、新聞等によって地下活動をつづけていた。

この稿を書きながら、筆者は二葉亭その人のロシア行を追体験したわけだが、満州のくだりを書くとき、ふと想い出されたのは、かの地で生まれ、育ち、戦後内地に引き揚げ、苦学をつづけ、やがて大学院に進み、医科大学の教師になった学友のことである。その者は惜しいことに夭折した。また満州国の首都・新京（長春）でくらした叔母は、無事帰

国できたが、流浪の生涯をおくり、家族に看取られず。ひとりさみしく養護施設で逝った。

おもえば人の一生は、ひとり芝居のようなものである。丈夫で元気なうちは、演技にまい進し、老いおとろえ、病んだのち瞑目する。……

二葉亭がロシア入りをして最初に泊った「オテル・メトロポール」（モスクワ）は、五ッ星ホテルである（じっさいは三ッ星ホテル）。が、ここは筆者が四十数年まえにソ連経由ではじめて渡欧したとき泊ったところでもある。偶然この文豪とおなじ宿に泊ったわけである。が、このことを知ったのはずっとあとのことである。かれの足跡を閲（けみ）してわかったことは、ベルリン・ケルン・アントウェルペン・リエージュ・ブリュッセル・ハーリッジ・ロンドン・シンガポールは、いずれも筆者が昔おとずれたことがある曾遊（そうゆう）の地（ち）であることである。

かっての旅の経験が、この稿をかくうえで少なからず役立ったように思える。旅行の必要性をみとめ、よその国や外地（満州、朝鮮、台湾）の風物についてわからなかったり、想像できぬときは、国内のものから類推せよ。あるいは映画をみて知見をうるよう努めよ、といったのは、先師である。

注

（1）山北駅（いまはＪＲ東海―御殿場線の駅）の〝アユずし〟は、かって有名であった。当時、急行列車がこの駅で停車した。酒匂川、河内（こうち）川上流の中川方面で採れた、あまり大きくない天然アユをおもに用いた。腹をさき、背骨をぬき、酢でシメたアユに、酢めしをつめ、甘酢しょうがをあしらったものという。駅弁として販売を引きうけていたのは、「とよロや」（樋口屋）と中川商店であった。この〝アユずし〟は、おもに一、二等の乗客によって買われたという（『鉄道小説汽車の友』明治31、『御殿場線物語』などを参照）。

（2）日向利兵衛（ひなたりへえ）（一八七四～一九三九、本名・利三郎）は、東京のひと。東京高等商業学校（現・一ッ橋大学）を卒業後、家督をつぐ。神戸県庁前で貿易商会をいとなんだ。のち東京海上火災保険に入社し、常務取締役となる。神戸時代、二葉亭と親交があったという。十川信介「解題」を参照。『二葉亭四迷　坪内逍遙　内田魯庵　編』所収、日本近代文学館、昭和50・3。

（3）John Foster Fraser 著 The Real Siberia, Cassell and Company, Ltd, London, New York, 1912, p.20

（4）ペテルブルクの一流ホテルは、じゅうぶん快適ではあるが、他の国の首都にあるそれと比べると、二流だという（Augustus J. C. Hare 著 Studies in Russia, George Allen, London, 刊行年不詳、四〇頁）。

（5）内田甲著『露西亜論』黒龍会本部、明治34・11、九九～一〇〇頁。

（6）安井亮平「ペテルブルクの二葉亭――下宿のこと、ジェのこと、ホテルのこと、その他」『共同研究　ロシアと日本　第2集』所収、平成2・3、一一九頁。

（7）同右。

（8）注（6）の一二三頁。原　有三の「ロシアの二葉亭」を参考にしている。

（9）ロシア人の朝食（ザフトラク）とはどのようなものなのか。朝かならず口に入れるものは、パン（すこし酸味のある黒パン）とコーヒーまたは紅茶。パンにはバターかチーズが添えられている。それにハムエッグかソーセージなどが出ることがある。いったいにどこの家庭でも、朝食はかんたんにすませるらしい。昼食は一時から二時ごろ、家によっては三時から四時ごろにとる。ロシアでは、昼食が正餐（ディナー）という。

このときスープ（シチーやボリシチなど）のあと、魚か肉もの、果物、果物の砂糖煮などを食べる。スープで美味なのは、「ウハー」と呼ばれる河サメのスープという。夕食は六時か七時ごろ、一皿か二皿ですませ、サモワールでわかした紅茶などをのむ（ロシア語通訳・黒田乙吉談）。

ロシアの一般的料理の一つは、「シチー」Shtshee だという。これは何種類もあるが、一口でいうとキャベツのスープである。貧民も金持もこのキャベツスープをこのむらしい。かれらは肉も好きであるが、それを焼いたり、あぶったり、くん製にすることを嫌い、ゆでたり、塩づけにしたり、ピクルスにして食べるという。ロシア人は魚も好むようだが、一八三二年（天保三）ペテルスブルクは、〝にしん〟を五万三千トン輸入し、消費した。帝政時代、下層民は黒パンとにしんの塩漬を常食としていた。毎朝、にしんを入れたおけを頭にのせて、行商が売りにきたという（幕生・山内作左衛門）。

飲物についていえば、「クバス」Kwas（うすいビール――大麦、麦芽、ライ麦などからつくる）は、国民的飲物であり、ワインやシャンペンは上流階級、ブランデーは下層階級の飲物とされ、とくにブランデーは、ちょっとした贈物やワイロとして用いるという（J. G. Kohl 著 Russia, Chapman and Hall, London, 1842, pp.135～139）。

（10）二葉亭四迷は、なかなか美食家であり、とくに茶は上等の〝玉露〟が大の好物であった（大庭柯公「対露西亜の長谷川君」）。

（11）帝政時代（一八六〇年代）にペテロブルクにいた幕生・山内作左衛門によると、米はインド米であったという。その米や大根をもとめ、長崎の輸入品〝Japansch Zoya〟（ヤパンスゾヤ）（一合五勺入りの日本のしょう油）に三ルーブリもの大金を払い、大根おろしにして味わったという。

（12）信夫淳平著『小村寿太郎』新潮社、昭和17・12。

（13）帝政時代のロシア式フロ（蒸しフロ）については、幕府留学生・山内作左衛門の報告がある。ペテルブルグ市内にフロ屋が数ヵ所あったという。浴

場は三つの部屋から成っている。第一の部屋で衣服をぬぐ。そこに長椅子や鏡などがある。第二の部屋には、蒸気をつくる暖炉や起臥する階段がある。第三の部屋は、冷水や温水を入れた浴槽があり、好みによっていずれか用いる。また体の垢などを洗い流したりする。入浴料金は、銀一錢（一ルーブル？）という。フロ屋がいちばん混むのは土曜日という。幕生は週に一度、フロ屋にいったという（「魯西亜事情」）。

当時のロシア式フロ（バーニャ）についてはイメージできない。が、蒸しフロが中心らしい。大きな暖炉に大きな石のかたまりがあり、それを火の玉のように熱し、ときどき水をかけて蒸気を立たせ、部屋の空気を熱する。この蒸しフロに入り、汗と垢をだしたあと、ぬるま湯をざっとあびておしまいだという。さらに洗い場に行って横になり、三助（客のからだを洗うのを仕事とする使用人）に、体を洗ってもらうこともある。

三助は石けん玉の入った大きなおけから、それをバケツに汲んできて、客のからだに一面かけると、布ぶくろで洗う。そのあと謝礼として、ビールを何本かやるのが習慣という（「所謂露西亜風呂（いわゆるロシアぶろ）とは」『柯公全集　第三巻』所収、大正14・5）。

安いフロ屋で入場料は、二、三〇コペイカであったという。二葉亭らがいったところは高級店であったものか、何ともわからない。

（14）The Committee of Fifteen: The Social Evil, G. P. Putnam's Sons, New York, and London, 1902, p.2

（15）London Labour and London Poor; of Prostitution in Russia, 1862, p.166

（16）William W. Sander 著 The History of Prostitution, The Medical Publishing Co., 1906, p.273

（17）右の一六六頁。

（18）注（17）におなじ。

（19）Laurie Bernstein 著 Sonia's Daughters—Prostitutes and their regulation in Imperial Russia, University of California Press, Berkeley, London, 1995, p.22

（20）山内作左衛門［三〇歳］

小沢清次郎［一三歳］　田中次郎［一五歳］　大築彦五郎［一六歳］　市川文吉［一九歳］　緒方城次郎［一二歳］。

山内は箱館奉行支配調役、田中は同心次男。小沢・大築・市川・緒方ら四名は、開成所の語学けいこ人であった。山内は慶応三年（一八六七）病により帰国した。慶応四年（一八六七）幕府倒壊により、小沢・大築・緒方・田中らは帰国し、市川文吉だけが残留し、プチャーチン伯邸（キロシュナヤ一八番地）に身をよせ、明治六年（一八七三）九月帰国した。同人はのち外務省、外国語学校に勤めたが、四十代で隠遁生活に入った。

（21）『村山龍平伝』朝日新聞社、昭和28・11、四六二頁。

（22）『朝日新聞小史』朝日新聞社、昭和36・3、四九頁。

主なる参考文献

『二葉亭四迷全集』第14巻、第15巻、第16巻、第17巻、岩波書店、昭和28・2〜同29・6。
『二葉亭四迷全集』第6巻、第7巻、別巻、筑摩書房、平成元・6〜平成5・9。
『明治文学全集　17　二葉亭四迷（嵯峨の屋おむろ）集』筑摩書房、昭和46・11。
原田藤一郎著『亜細亜大陸旅行日誌』清韓露三国評論』嵩山堂出版、明治27・3。
内田　甲著『露西亜論』黒龍会本部、明治34・11。
坪内逍遙、内田魯庵　編輯『二葉亭四迷　多方面より見たる長谷川辰之助君及其追懐』易風社、明治42・8。
『太陽臨時増刊　一等国』第16巻第2号、明治43・1。
渋川柳太郎著『藪野椋十　日本と世界見物』誠文堂、大6・6。
昇曙夢編『露国文豪カリカチュア』世界思潮研究会、大正11・2。
ア・ヴェ・シェスタコフ著、荒川実蔵訳『ソ連史』第三書房、昭和21・10。
佐藤尚武所述『二つのロシア』世界の日本社、昭和23・7。
中村光夫著『二葉亭四迷伝』大日本雄弁会講談社、昭和33・12。
佐藤尚武著『回顧八十年』時事通信社、昭和38・4。
中村光夫著「レニングラードの二葉亭」『朝日新聞』（夕刊、昭和46・11・17付）
安井亮平「ペテルブルクの二葉亭――下宿のこと、ジェのこと、ホテルのこと、その他」『共同研究　ロシアと日本　第2集』所収、平成2・3。
鮎沢信太郎著『漂流』至文堂、昭和31・5。
内藤遂著『遣露伝習生妹末』東洋堂、昭和18・9。
『満州』政教社、大正2・8。
『南満州鉄道旅行案内』満州日日新聞社、大6・1。
『西伯利鉄道旅行案内』鉄道院運輸局、大正8・9。
『朝鮮満州　支那案内』丁未出版社、大正8・10。
『長春事情』長春商品陳列所、昭和3・4。
『満州写真帖』中日文化協会、昭和4・12。

『満蒙風景写真帖』中日文化協会、昭和7・1。
『新満州への里程』先進社、昭和7・5。
藤田元春著『満州歴史地理』冨山房、昭和11・3。

J. G. Kohl: Russia, Chapman and Hall, London, 1842

注・同書にはロシア人の食生活についての記述がある（一三六～一三九頁）。

Élisee Reclus: Nouvelle Géographie Universelle, V L'Europe Scandinave et Russe, Librairie Hachett et Cie, Paris, 1880

注・ペテルブルグの地理について参考とした。

Samuel Turner: Siberia, A record of travel, climbing, and exploration, T. Fisher Unwin, London, 1905
John Foster Fraser: The Real Siberia, Cassell and Company, Ltd, London, New York, 1912
Ruth Kenzie Wood: The Tourist's Russia, Andrew Melrose, London, 1912
ジー、シー、ピアマン著 Tourists' Guide to Japan, ボックス・オブ・キュリオス出版印刷所、大正2・9。
Meriel Buchanan: Recollections of Imperial Russia, Hutchison & Co, London, 1923
London Labour and London Poor: A cyclopaedia of the condition and earnings, ……
Griffin, Bohn, and Company, London, 1862

注・この中にロシアにおける売春小史の章節がある（一六五～一六七頁あたり）。

The Committee of Fifteen: The Social Evil, G. P. Putnam's Sons, New York and London, 1902
William W. Sanger, M. D: The History of Prostitution, The Medical Publishing Co, New York, 1906
Laurre Bernstein: Sonia's Daughters — Prostitutes and their regulation in Imperial Russia, University of California Press, Berkeley, London, 1995

注・同書はロシアの売春史についての好書（博士論文）。

Augustus J. C. Hare: Studies in Russia, George Allen, London, 刊行年不詳。

ほかに地誌的なものとして、つぎのようなものを参考とした。

Karl Baedeker: Northern Germany (1904), Berlin and its Environs (1923), Great Britain (1906), London and its Environs (1923), Russia (1914), Karl Baedker Publisher, Leipzig